

城山古墳群発掘調査報告書

1992年3月

飯山町教育委員会

刊行にあたって

この報告書は、飯山町教育委員会が平成3年10月10日から平成3年12月1日まで実施した、城山（しろやま）古墳群の発掘調査の記録であります。

城山古墳群は飯山総合運動公園内の丘陵に所在しております。今回の調査は、本町でははじめての国の補助事業であることから、香川県教育委員会事務局文化行政課及び善通寺市教育委員会事務局文化振興室のご指導を得て調査を実施しました。

調査の結果、鉄劍・鉄刀・鉄鎌・朝顔形埴輪・須恵器など貴重な文化財が出土し、山頂の1基は古墳時代前期（4世紀）、尾根筋の3基は古墳時代中期（5世紀）に属することが判明し、古代への関心が高まってまいりました。

本古墳群は、将来古墳公園として整備をはかり、住民の埋蔵文化財についての理解や関心が広まることを期待するとともに、文化の向上に少しでも役立つことが出来れば幸と思います。

最後に、今回調査にご協力をいただきました関係者の皆さま方に、感謝の意を表しますとともに、厚くお礼申し上げます。

平成4年3月31日

飯山町教育委員会
教育長 増田幸正

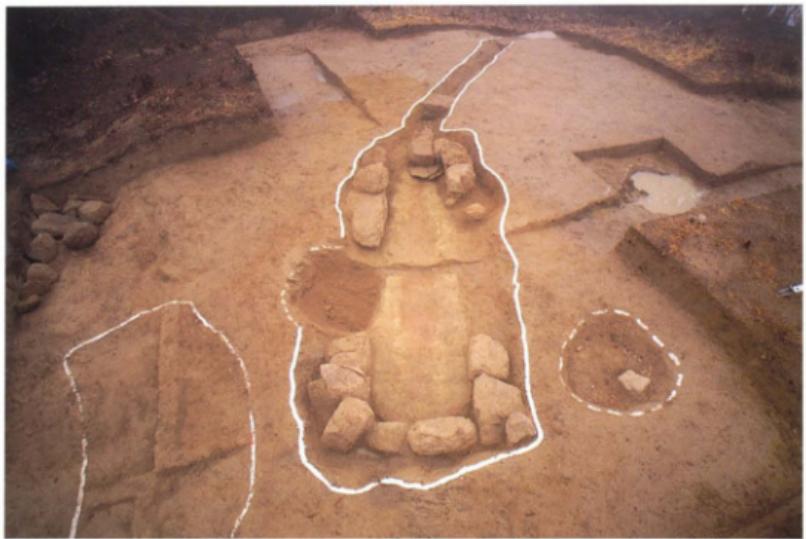




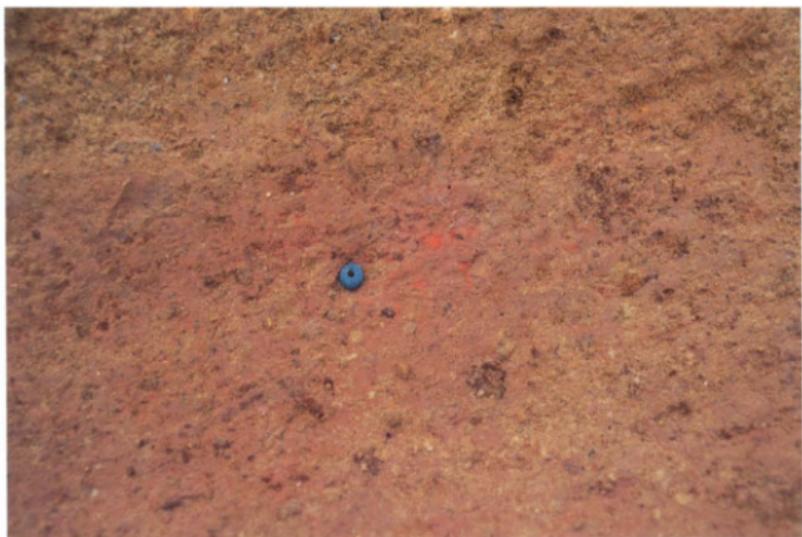
① 城山 1号墳墳丘東側トレンチ・朝顔形埴輪出土状況～北から～



② 城山 2号墳北側平坦部における祭祀遺構検出状況～東から～
(土師器の壺 2点が置かれた地山面に火による変色域が認められる)



③ 城山 4 号墳主体部(整穴式石室)検出状況～南から～



④ 城山 4 号墳主体部粘土床上のガラス玉と赤色顔料出土状況

例　　言

1. 本書は香川県綾歌郡飯山町東坂元字河内 2713 番地 1 に所在する、城山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本古墳群は、総合運動公園建設に伴い実施された昭和63年度の事前調査で発見されたものであるため、それ以前は存在が知られていなかった。調査の対象となった遺構群は合計 4 基の円墳で構成されており、北から順に城山 1 号墳～城山 4 号墳とした。
3. 発掘調査は平成3年10月10日から平成3年12月1日まで行われ、引き続き平成4年1月31日まで、出土遺物等の整理作業と報告書の執筆を行った。
4. 調査は飯山町教育委員会社会教育課が香川県教育委員会文化行政課の指導のもと、善通寺市教育委員会の協力を得て実施した。組織は下記のとおりである。

総括 飯山町教育委員会 教育長 増田 幸正
　　" 教育次長 進 和彦
　　" 社会教育課長 喜田 格也
　　" 社会教育課主査 古竹 常子
調査担当 善通寺市教育委員会 文化振興室主任 笹川 龍一
調査補助 四国学院大学考古学研究会 藤崎直哉・佐伯正樹・中山 豪・古本 寛
　　矢野ゆかり
調査補助 地元調査参加者 石村 守・岩崎秀義・川鍋昭子・藪下政子
　　小林ツヤ子・小林巳代子・谷本キミ子・西尾晋一
　　山下初代・山本正市・三谷アキノ・三谷重一

5. 本書の執筆及び遺物の実測は調査担当者である笹川龍一が行い、遺構の実測については四国学院考古学研究会の協力を得て笹川が行った。
6. 本報告書に掲載している実測図の縮尺については全てスケールで表示した。また遺構実測図中の矢印は全て磁北を指す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「丸亀」を使用した。
7. 本報告書中の遺物に付記した番号は、出土状況・実測図・写真全て統一してある。
8. 発掘調査及び整理期間を通じて、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）
　　徳島県立博物館（天羽利夫）、香川県工業技術センター、香川県埋蔵文化財調査センター、國木健司

目 次

刊行にあたって	1
グラビア① 城山1号墳墳丘東側トレンチ・朝顔形埴輪出土状況	3
グラビア② 城山2号墳北側平垣部における祭祀遺構検出状況	3
グラビア③ 城山4号墳主体部（竪穴式石室）検出状況	5
グラビア④ 城山4号墳主体部粘土床上のガラス玉と赤色顔料出土状況	5
例　　言	7
目　　次	9
第一章　　遺跡周辺の地理と歴史	12
第二章　　調査に至る過程	16
第三章　　調査の概要（各遺構と出土遺物）	18
①　城山1号墳	20
②　城山2号墳と祭祀遺構	26
③　城山3号墳	31
④　城山4号墳	35
第四章　　ま　　と　　め	43
岡　　版	45

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺遠景	12
第2図	調査地と周辺の主要遺跡	14
第3図	城山地形図及び試掘調査区位置図	17
第4図	城山北西尾根地形測量図及び調査区配置図・地形断面図	19
第5図	城山1号墳墳丘地形測量図	20
第6図	城山1号墳墳丘断面図	21
第7図	城山1号墳周溝及び遺物出土状況実測図(南トレンチ)	22
第8図	城山1号墳埴輪及び遺物検出状況実測図	22
第9図	城山1号墳周溝及び墳丘周辺出土遺物実測図	23
第10図	城山1号墳主体部鉄器出土状況実測図	24
第11図	城山1号墳主体部周辺墳丘断面図	24
第12図	城山1号墳主体部出土鉄器実測図	25
第13図	城山2号墳墳丘地形測量図	26
第14図	城山2号墳埴丘断面図	27
第15図	城山2号墳周溝及び遺物出土状況実測図(北トレンチ)	28
第16図	城山2号墳周溝及び墳丘周辺出土遺物実測図	28
第17図	城山2号墳主体部実測図	29
第18図	城山2号墳主体部出土鉄器実測図	29
第19図	祭祀遺構実測図(Cトレンチ)	30
第20図	祭祀遺構出土遺物実測図	30
第21図	城山3号墳墳丘地形測量図	31
第22図	城山3号墳墳丘断面図	32
第23図	城山3号墳墳断面図(南東トレンチ・南西トレンチ)	33
第24図	城山3号墳主体部実測図	34
第25図	城山3号墳主体部出土鉄器実測図	34
第26図	城山4号墳墳丘地形測量図	35
第27図	城山4号墳墳丘断面図	36
第28図	城山4号墳埴輪部土層堆積状況実測図(北東トレンチ)	37
第29図	城山4号墳第1主体部内土層堆積状況実測図	38
第30図	城山4号墳第1主体部実測図	39・40
第31図	城山4号墳第1主体部排水溝実測図	41
第32図	城山4号墳第1主体部出土遺物実測図	41
第33図	城山4号墳第2主体部実測図	42
第34図	城山古墳群調査区出土遺物実測図	42

図 版 目 次

第35図	城山と飯山総合運動公園全景	47
第36図	城山1～3号墳周辺部の発掘調査着手前の状況	48
第37図	城山1～3号墳周辺部の伐採後作業と地形測量作業	48
第38図	伐採作業後の城山1～3号墳	49
第39図	発掘調査前の城山1号墳	49
第40図	城山1号墳南トレンチ発掘作業風景	50
第41図	城山1号墳南トレンチ周溝検出状況	50
第42図	城山1号墳南トレンチ周溝内埴輪出土状況	51
第43図	城山1号墳南トレンチ周溝内土層堆積状況	51
第44図	城山1号墳西トレンチ周溝検出状況	52
第45図	城山1号墳北トレンチ周溝検出状況	52
第46図	城山1号墳東トレンチ設定状況	53
第47図	城山1号墳Bトレンチ朝顔形埴輪出土状況	53
第48図	城山1号墳主体部トレンチ・鉄器出土状況	54
第49図	城山1号墳主体部トレンチ・鉄器出土状況(部分)	54
第50図	城山1号墳主体部西側十層堆積状況	55
第51図	Cトレンチ及びBトレンチ設定状況	55
第52図	Cトレンチ祭祀遺構検出状況	56
第53図	Cトレンチ祭祀遺構と土層堆積状況	56
第54図	城山2号墳北トレンチ周溝検出状況	57
第55図	城山2号墳北トレンチ周溝内須恵器出土状況	57

第56図	城山2号墳北トレンチ周溝内土層堆積状況	58	第85図	城山4号墳第1・第2主体部検出状況	72
第57図	城山2号墳西トレンチ周溝検出状況	58	第86図	城山4号墳第1・第2主体部検出状況	73
第58図	城山2号墳東トレンチ墳裾部検出状況	59	第87図	城山4号墳第1・第2主体部上部土層堆積状況	73
第59図	城山2号墳南トレンチ・西トレンチ周溝検出状況	59	第88図	城山4号墳第1主体部上面検出状況	74
第60図	城山2号墳南トレンチ周溝検出状況	60	第89図	城山4号墳第1主体部検出作業状況	74
第61図	城山2号墳主体部東側土層堆積状況	60	第90図	城山4号墳第1主体部完掘状況	75
第62図	城山2号墳主体部検出状況	61	第91図	城山4号墳第1主体部完掘状況	75
第63図	城山2号墳主体部完掘状況	61	第92図	城山4号墳第1主体部北側石室構築状況と粘土床	76
第64図	城山3号墳北東トレンチ・南東トレンチ周溝検出状況	62	第93図	城山4号墳第1主体部排水溝検出状況	76
第65図	城山3号墳北東トレンチ周溝内土層堆積状況	62	第94図	城山4号墳第1主体部排水溝下部構造検出状況	77
第66図	城山3号墳北トレンチ周溝内土層堆積状況	63	第95図	城山1号墳第1主体部から瀬戸内海を望む	77
第67図	城山3号墳南西トレンチ周溝検出状況と主体部検出状況	63	第96図	城山1号墳出土銅鏡形埴輪	78
第68図	城山3号墳北西トレンチ墳裾部検出状況	64	第97図	城山1号墳出土埴輪片	78
第69図	城山3号墳Eトレンチ墳裾部検出状況	64	第98図	城山1号墳出土須恵器	78
第70図	城山3号墳主体部検出状況	65	第99図	城山1号墳及び2号墳出土須恵器片	79
第71図	城山3号墳主体部土層堆積状況	65	第100図	城山2号墳出土須恵器	79
第72図	城山3号墳主体部検出状況	66	第101図	祭祀遺構出土土師器龜竈	79
第73図	城山3号墳主体部完掘状況	66	第102図	城山1号墳出土鐵器(保存処理前)	80
第74図	城山4号墳発掘調査着手前の状況	67	第103図	城山1号墳出土鐵器(保存処理後)	80
第75図	城山4号墳の伐採作業と発掘調査作業風景	67	第104図	城山1～3号墳出土鐵器(保存処理前)	81
第76図	城山4号墳南西トレンチ設定状況	68	第105図	城山1～3号墳出土鐵器(保存処理後)	81
第77図	城山4号墳Cトレンチ設定状況	68	第106図	城山3号墳出土鐵器(保存処理前)	82
第78図	城山4号墳南西トレンチ設定状況	69	第107図	城山3号墳出土七鐵器(保存処理後)	82
第79図	城山4号墳北西トレンチ墳裾部検出状況	69	第108図	城山4号墳出土ガラス製小玉	82
第80図	城山4号墳北東トレンチ墳裾部検出状況	70	第109図	城山1号墳出土須恵器(环蓋)	82
第81図	城山4号墳北東トレンチ墳裾部上層堆積状況	70	第110図	城山4号墳出土須恵器系土師器(环)	82
第82図	城山4号墳Hトレンチ墳裾部検出状況	71			
第83図	城山4号墳Hトレンチ墳裾部土層堆積状況	71			
第84図	城山4号墳Iトレンチ設定状況	72			

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

飯山村は香川県のほぼ中央で綾歌郡の北西、丸亀平野の南東に位置しており、大規模な扇状地形を呈する平野の南東側にあるため、地形的には北東部一帯が山地と丘陵地で、その他は平野部であり、中央を大東川が北流し瀬戸内海に流れ込んでいる。大東川とその西側を並行して流れる土器川に挟まれた平野部は古代は氾濫原であったため、現在も出水が多く残っており、ここに町のシンボルである秀麗な飯野山（標高421.9m）が平野中にそびえている。

この飯野山は丸亀平野を流れる土器川と大東川の間にあり、その富士山型の山容は火山ではなく、開析侵食されて円錐状になったものである。この山は周囲の山稜から独立した孤峰であるため、内陸部や海上の至る場所から美しい姿が望め“讃岐富士”的呼称もあり、山頂には“おじょも（巨人）伝説”的伝わる岩塊があり、古代の巨石信仰の名残と考えられている。また、西麓には「延喜式」神名帳に記載のある飯依彦命を祭神とする飯神社が鎮座している。飯山村のみならず、丸亀平野周辺部で古代から人々の信仰の対象とされて来た山である。

また、古代の人々の活躍の場であった丸亀平野は、土器川やその支流であったとみられる金倉川・弘田川等の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野であり、満濃町北部を起点とした扇状地地形を基本に、これらの河川による氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂疊層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。



第1図 調査地周辺遠景～北西から～

そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層と下の洪積層の間では、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ丸亀平野の古代文化は約3,000年以上遡ることが判明している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人類の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が数多く知られている。こうした平野部の遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、三井・中ノ池遺跡などは現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線を現在の標高5mあたりと推定すれば、海岸部に形成された集落であることがわかる。

丸亀平野西部の善通寺市周辺では、陣山遺跡・瓦谷遺跡・我押師山遺跡などから銅鐸・銅劍・銅矛等が多数出土しており、周辺に広がる弥生時代初頭から古墳時代末にかけての中枢的な集落遺跡である旧練兵場遺跡群や、九頭神遺跡・石川遺跡・稻木遺跡等を本拠とした集団との関連も注目されている。

やがて古墳時代になると弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が地域を代表する権力者として生まれ変わり、各自の勢力域に墓域を設け多くの古墳を築くようになる。

飯山町周辺部では、城山南麓遺跡・割古池・蓮池・久保王塚（付近）・坂元神社遺跡・大窪池と計6箇所で後期旧石器の散布が確認され、縄文時代の遺物も割古池・仁池・大窪池に散布が確認されているが、全て散布地である。生活の痕跡を示す遺構等は確認されていないものの、当町の古代文化が約2万年前まで遡ることは間違いないようである。

弥生時代の遺跡は、弥栄神社遺跡・三ノ池遺跡・仁池・大窪池など、意外にも平野部に少なく山裾や丘陵部に多く確認されている。しかしながら、四国横断自動車道路の建設に伴い実施された埋蔵文化財の発掘調査によって、昭和60年から昭和62年にかけて、飯野山北側の大東川下流域の自然堤防上で発見された下川津遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であり、これと同じ自然堤防地形には同種の遺跡が埋蔵されている可能性が極めて高いものと考えなくてはならないであろう。

また、散布地が溜め池に多い点については、地下の埋蔵物が露出し易い環境にあるからであり、周辺に未発見の遺構や遺物が埋蔵されていると見てよい。

やがて古墳時代を迎えると、町内だけでも40基を越える古墳が丘陵部や山裾部に築かれるが、残念なことに開墾等により破壊されてしまったものも少なくない。ただ、発見の度に郷土史研究家等の手による遺物の収集や記録が行われており、現在も遺構の構築状況や出土遺物の内容を知ることが出来る。

前期の古墳としては三ノ池古墳（前方後円墳）や讚留靈王古墳などが知られており、中期



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

鶴山周辺の主要遺跡

- 01. 鶴山南麓遺跡〔内〕 02. 鶴谷塚〔田・萬・秀〕 03. 治〔田〕 04. 久保遺跡〔田・秀〕 05. 坂元神社遺跡〔田〕 06. 大庭地〔田・萬・秀〕 07. 仁地〔萬・秀〕
- 08. 丹波井社遺跡〔外〕 09. 鹤谷地〔秀〕 10. 鶴谷〔秀・古〕 11. 田内〔秀〕 12. 鶴下荒神〔秀〕 13. 火田池〔秀〕 14. 三ノ池遺跡〔秀〕 15. 鶴野山山頂遺跡〔秀〕
- 16. 岩〔秀〕 17. 次郎山遺跡〔秀〕 18. 西の山遺跡〔秀〕 □ 開放地〔山古遺跡〕 19. お城跡〔古墳〕 20. 駐留1号墳 21. 駐留2号墳 22. 駐留谷古墳
- 23. 駐留寺古墳 24. 久長大塚北古墳 25. 久長大〔王〕塚 26. 基田荒神古墳 27. やかじ古墳 28. 白石西古墳群 29. 三ノ池〔高麗山〕古墳
- 30. 三ノ池西古墳 31. 魔古墳 32. 西宮古墳 33. 鮎原性古墳群 34. 大谷〔水森原〕古墳・秋葉古墳群(秋季三塚) 35. 国仲〔塚〕古墳 36-38. 玄光寺西古墳群
- 39. 十三塚古墳 40. 山田古墳 41-44. 次郎山古墳群 45. 真野古墳 46. 駐留土古墳 47. 駐・東・塚 48. 駐谷古墳 49. 駐草寺跡

周辺の主要遺跡

- 50. 中ノ池遺跡〔秀〕 51. 五条塚〔秀〕 52. 田端兵衛塚〔秀・古〕 53. 雉木塚跡〔秀〕 54. 石川津跡〔秀〕 55. 九郎神遺跡〔外〕 56. 下川津遺跡〔秀・古〕
- 57. 下川津遺跡〔秀〕 58. 伴村岡寺 59. 伴村寺 60. 春邊寺古跡 61. 開法寺跡 62. 駐牧區府跡 63. 鶴山遺跡 64. 有間古墳群〔基島山古墳〕
- 65. 佐治田古墳群(安治第三号墳) 66. 青ノ山古墳群

* 地名のみを記したものは敷地であり、[] 内は地名を示している。

[A. 例 : ■] 駐留番出土地 × 通称敷地地 ■ 主要古墳 ▲ 古代寺院 △ 古城跡 ■ 国府跡 ◇ 供祀遺跡(巨石)]

のものは少なく、後期になると城山南麓の弥栄神社古墳群・久保大(王)塚・十三塚古墳・次郎山古墳群など、著しく増加し副葬品も豊富になる。

この状況は、前述した下川津遺跡における古代集落の展開状況が、弥生時代後期から古墳時代前期に至り、中期に一時廃絶した後に、後期に再び広がりを見せる点と同調しており、両者の関連が注目されるばかりでなく、丸亀平野周辺部における新興勢力の台頭や社会環境の変化等を知る上で極めて興味深い。

下川津遺跡は古墳時代を経て奈良～平安時代へと続いて行くことが確認されているが、地方豪族たちも律令制度の整備に伴い、次第に体制に組み込まれ、蓄積されて富や技術は古代寺院の建設に費やされることとなる。

本町の南東部の下法軍寺にも法勅寺跡が残されており、旧境内に柱座掘り込み式の塔心礎石が遺存し、周辺から八葉復弁・素弁の蓮華文軒丸瓦、重弧文軒丸瓦等、奈良時代以前に遡る古瓦が出土することが知られており、当地を開発した綾氏縁の寺であったのではないかと考えられている。

また、律令制下の飯山町は鶴足郡に属しており、条里制が施行されたらしく、上・下法軍寺には条里制の遺称と思われる小字名と共に方格地割りが残る。

江戸時代のこの地域には、上法軍寺・下法軍寺・小河・東坂元・河原・真時の7箇村が成立していたが、明治23年の市制町村制施行により、上法軍寺・下法軍寺・東小川の3箇村は法勅寺村、東坂元・西坂元・川原・真時の4箇村は坂本村となった。更に昭和31年には法勅寺村と坂本村が合併して飯山町が成立し現在に至っている。

現在、当町の中央部には国道438号線が南北に貫通し、これと交差する二つの主要県道が東西に抜けており、近年は高松市・丸亀市・坂出市などへの通勤者も多く、ベッドタウン化しつつある。しかしながら、町の主産業は農業であり、明治以降桃の栽培が盛んに行われており、現在では水田にまで作付けが広がっている。

参考文献 「飯山町誌」 飯山町 1988年8月

第二章 調査に至る過程

昭和62年12月、飯山町東坂元字河内2713番地1、通称城山（川原山）の北側山麓部で町立の総合運動公園を建設するための造成工事（9.37ha）が行われることが決定された。

しかしながら、当該地には果樹園造成中に弥生時代の壺棺が出土した記録があり、既に周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図にも記載されていたことから、町教育委員会では埋蔵文化財の確認調査と保存について、昭和63年4月22日から香川県教育委員会と協議を重ね、同月29日から町教育委員会が主体となり分布調査等を実施した。

壺棺が出土したと伝わる尾根については分布調査と併せて試掘調査が実施されたが、その他の地区においても遺跡が所在する可能性が高いと判断されたため、5月24日、県教育委員会埋蔵文化財担当職員が現地を視察した。その結果、小規模なマウンドと共に伴うと考えられる溝状遺構が数箇所で確認され、その溝内から埴輪片・須恵器片が出土したため、当該地には直径十数m程度の円墳が数基所在することが判明した。

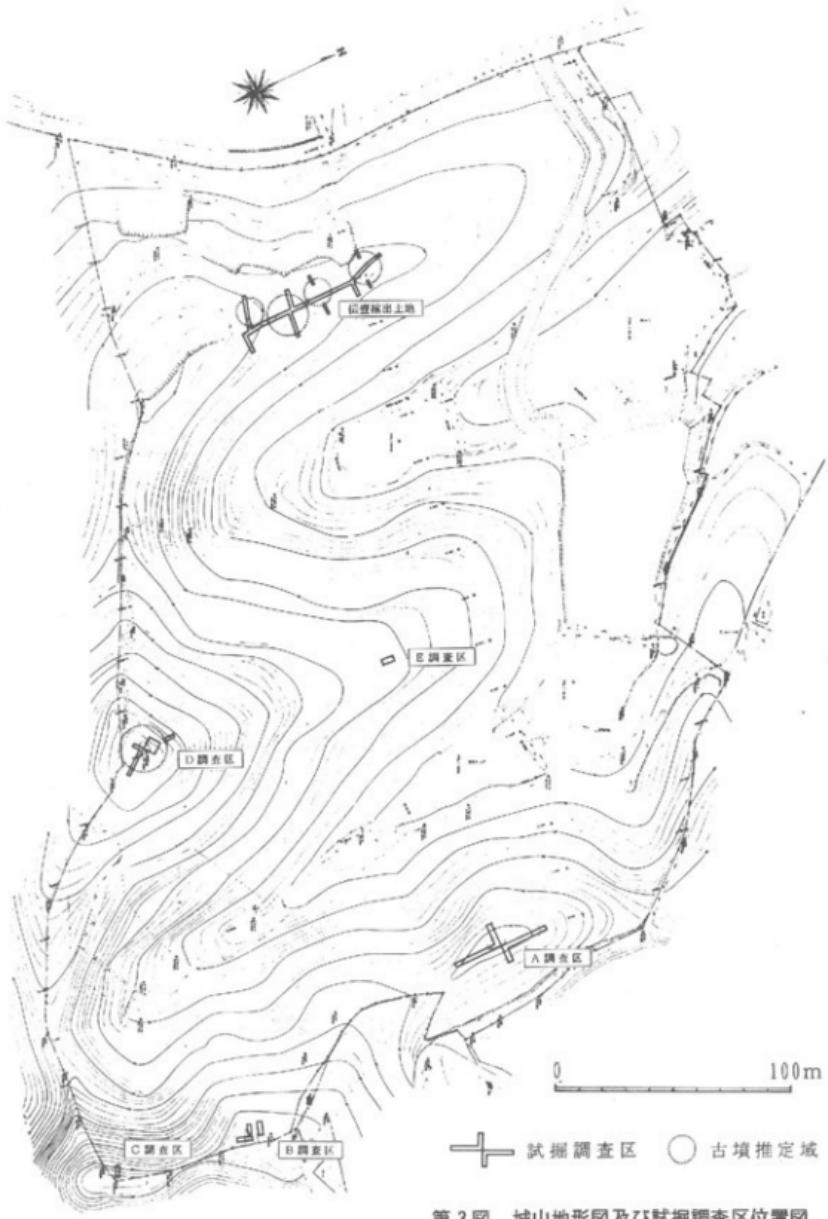
町教育委員会ではこの結果を重視し、古墳群について現状保存を決定し、その保存及び活用のための基礎資料を得ると共に、その他の地区についての遺跡の有無を確認するための確認調査を、6月16日から22日まで香川県教育委員会の指導のもとに実施した。

確認調査は、城山山頂部及び周辺の尾根上に5箇所の調査区（A～E地区）を設定し実施されたが、A～C及びD地区では遺構等は確認されなかった。ただ、城山山頂部において1基の古墳が確認された。規模は直径20m・高さ3.5mの程度であり、平野を見降す北から西方向の墳丘基底部には地山削り出しによる明瞭な傾斜変換が認められたが、南から東側では自然地形との識別が困難であった。また、墳頂部において竪穴式石室と土塙墓状の計2基の主体部が確認されたが、試掘調査であったため上面検出のみに留められており、この時点では正確な規模等は明らかにはされておらず、遺物についても中世上師器片が出土しただけであり古墳に伴うものは未確認である。

町教育委員会では確認調査の結果を受けて、当古墳群を復元・整備し公開するための基礎資料を得るための発掘調査を、平成3年度国庫補助事業として申請の手続きを行った。しかしながら町教育委員会には埋蔵文化財専門職員がいないため、県教育委員会に協力を求めたが多忙との理由により協力が得られず、発掘調査の経験を持つ近隣の関係機関に照会し、最終的に普通寺市教育委員会が協力し調査を実施することとなった。

事業費総額は3,105,831円で、内訳は国費1,524,000円、県費508,000円、町費1,073,834円である。

参考文献 「香川県埋蔵文化財調査年報～昭和63年度～」香川県教育委員会 1989.3



第3図 城山地形図及び試掘調査区位置図

第三章 調査の概要（各遺構と出土遺物）

現地での発掘調査は平成3年10月10日に着手した。調査地は一基の古墳が残ると見られる城山山頂部と、複数の古墳が残ると見られる山頂部西側から北に派生する尾根上の二箇所に分かれており、まず後者から調査を開始した。

事前の記録写真撮影を行った後に当該地を覆う樹木・下草の伐採作業を実施したところ、南から北に緩やかに降る尾根上に墳丘と見られる高まりが三箇所で認められた。尾根筋から東西両側の傾斜は比較的急であるのに比べて、遺構を含めた地形の変化は南端を除いて全体的に小さく、地形測量作業では12.5cm間隔での等高線を記録した。地形測量の結果、試掘調査時に1号墳、3号墳及び4号墳と推定された箇所では墳頂部と考えられる高まりが確認されたが、2号墳推定地では地形に人為的な変化が認められなかった。

試掘調査時の記録を基に地形測量作業の完了した1号墳から試掘トレーンチ痕を避けて調査区を設定し、掘削による調査を開始した。調査区は原則として幅2mで統一し、それぞれの墳丘の中心に十字に設定したが、長さは必要に応じて変えた。

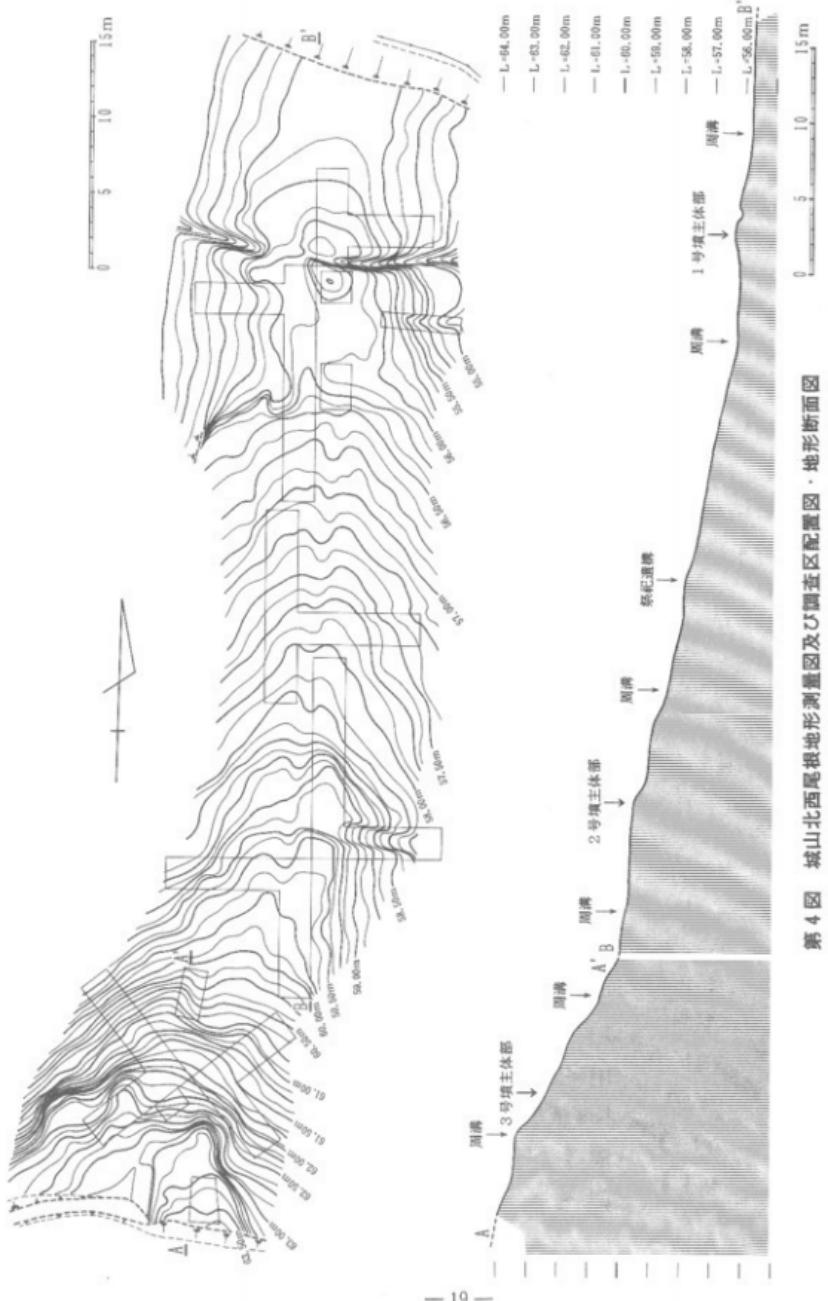
掘削調査の結果、1号墳では北側一部が開墾により失われていたものの、部分的に周溝が確認され、規模や構築状況を知ることができ、また主体部も副葬品とともに検出された。

2号墳推定地は外観は自然地形であるが、試掘調査時に溝状遺構が確認されている。そこで、この部分にも調査区を南北に設定したところ、土坑や柱穴状遺構、溝状遺構と共に、地上面上に遺存する2点の土師器の壺が検出された。試掘調査時に確認された溝状遺構の延長部分も確認されたが、これは地山の風化に伴う自然地形であり、地山面に見られる岩脈間の軟弱土層部分に沿って南東から北西に直線的に延びている。ここで確認された遺構からの出土遺物等は無いため時期や性格は不明であるが、土師器の壺については周辺の地山が焼けており、その形態や出土状況等から2号墳に供獻されたものではないかと考えられる。従って2号墳推定部分に古墳は存在しておらず、以下、試掘時に3号墳～5号墳とされていたものを2号墳～4号墳とする。

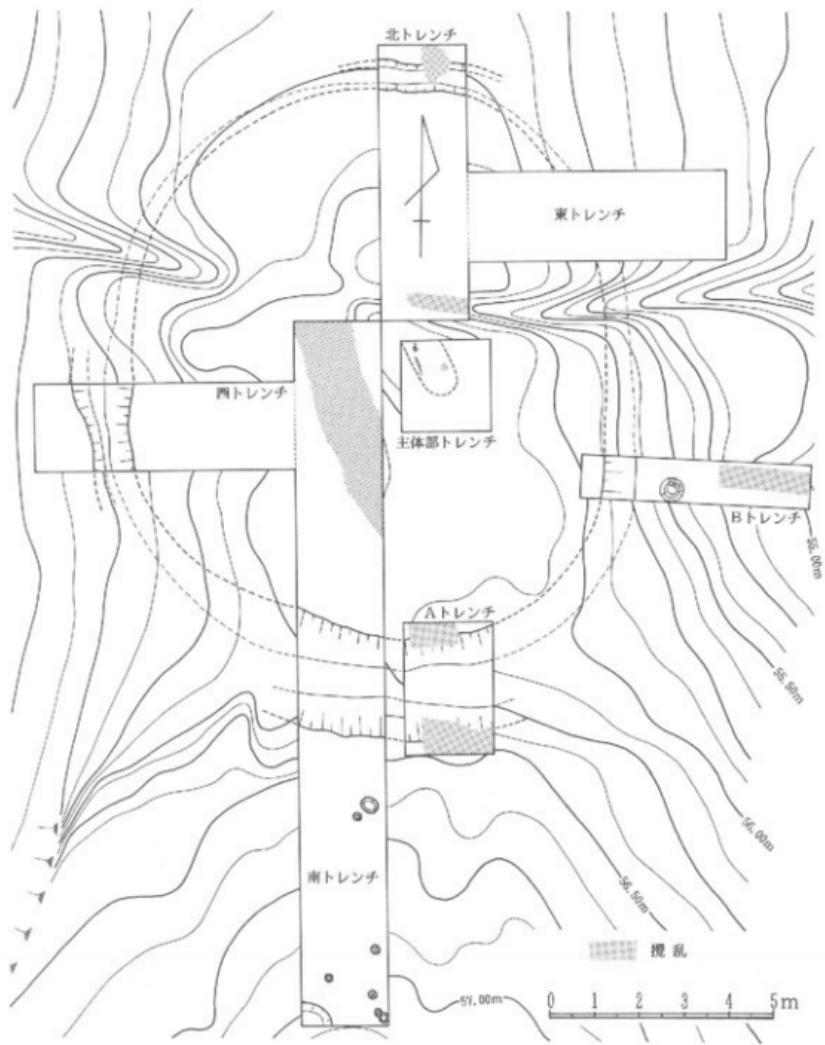
2号墳では1号墳同様に周溝が確認され、規模や構築状況を知ることができ、また主体部も副葬品とともに検出されている。また、3号墳では近年の開発に伴う土砂の堆積により地形が改変されていたものの、他の古墳同様、周溝や主体部を検出することができた。

この山頂部東側から北に派生する尾根上での発掘作業の完了後の実測作業等と並行し、城山山頂部の伐採作業と地形測量作業を実施し4号墳を確認した。ここでは、試掘調査時のトレーンチ痕と主体部の石材の露出が確認されたため、この痕に併せた調査区を設定し、墳丘中央部で竪穴式石室と土塚墓状遺構、計二基の主体部を検出した。また数箇所で墳裾部を確認することができた。

以下、調査の進展により確認された内容をその順に従って解説する。



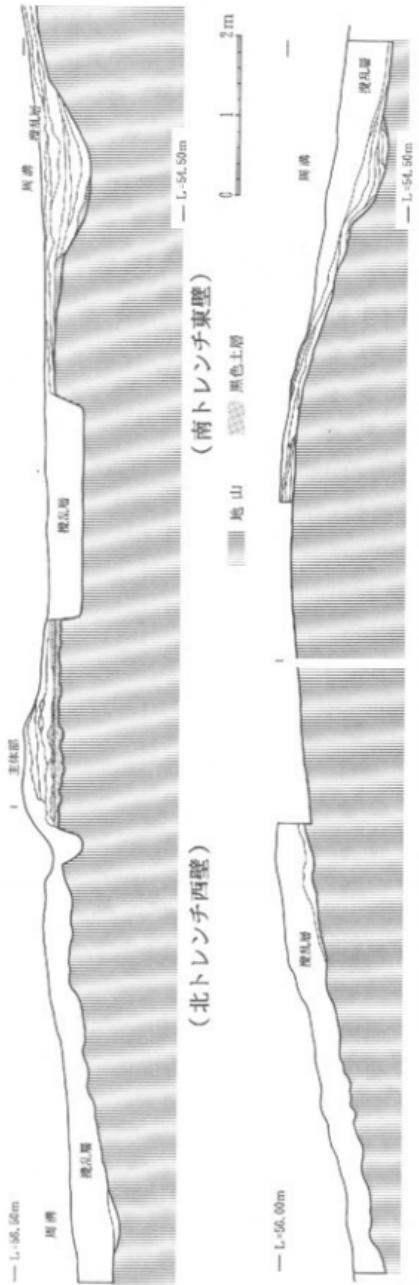
第4図 城山北西尾根地形測量図及び調査区配置図・地形断面図
(断面図中の遺構位置は調査後の結果を記入している)



第5図 城山1号墳丘地形測量図（調査区設置状況）

① 城山1号墳

城山1号墳は城山山頂から西150m程に位置する高まりから北に緩やかに下る尾根の中央部に所在している。1号墳は尾根の中央部に構築されていたが、これより北側は昭和63年



第6図 塚山1号墳丘断面図
(北トレンチ西壁) (南トレンチ東壁) (東トレンチ南壁)
(西トレンチ南壁)

の試掘調査によって遺構が存在しないことが確認されたため、尾根は削平され既に体育馆が建設されている。

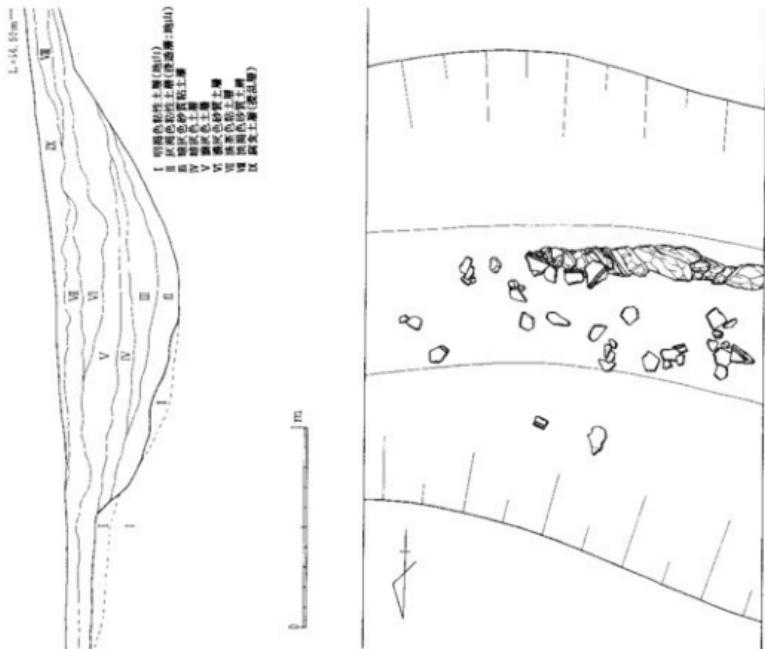
発掘調査は事前に実施した地形の測量結果をもとに、墳丘推定範囲中央部の高まりを中心に東西南北各方向に幅2mの調査区を設定した。ただし墳丘の北半分は過去に畑として開墾されており、墳丘中央部には畑に伴う東西に走る深い溝と植栽された樹木が平行に並んでいたため、周溝の遺存状況が良好であると見られる墳丘南側から掘削調査を開始した。

南側に設定したトレンチでは幅2m・深さ50cm程の周溝が検出され、埋土下層からは多量の円筒埴輪片・朝顔形埴輪片が出土している。埴輪片は第7図に示した周溝内のⅢ層から出土している。Ⅰ層中にはⅠ層(地山)に貫入した岩石が遺存しているが、これはⅡ層の浸透層であり、Ⅰ層上面が周溝の底部である。埴輪は小片となり最下層にのみ堆積しており、比較的早い時期に古墳の崩壊があったのではないかと考えられる。

また南トレンチを設定した際、試掘調査坑が墳丘を部分的に深く切っていることが判明したため、以後の調査区の設定は、必要に応じて墳丘の断面観察を必要とする場所を除いて、試掘調査坑の位置を避けて設定することとした。

西トレンチでも周溝の延長が検出されたものの、南トレンチのものと比べて規模は小さい。また擾乱により遺構が消滅していた東トレンチの代わりに設定したBトレンチでは、地山を削り出して整形

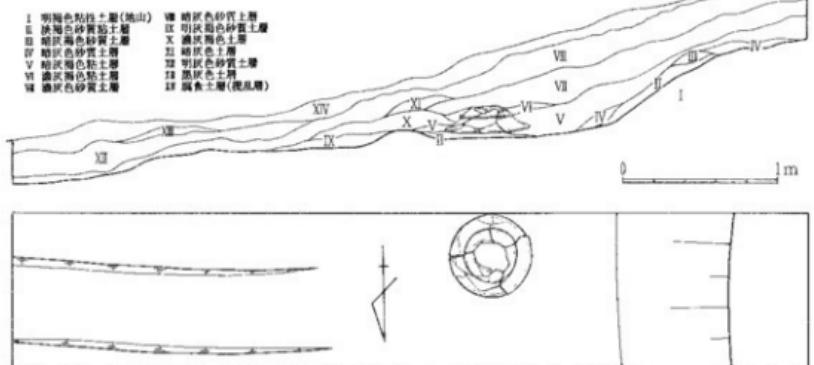
第7図 城山1号墳周辺及び遺物出土状況



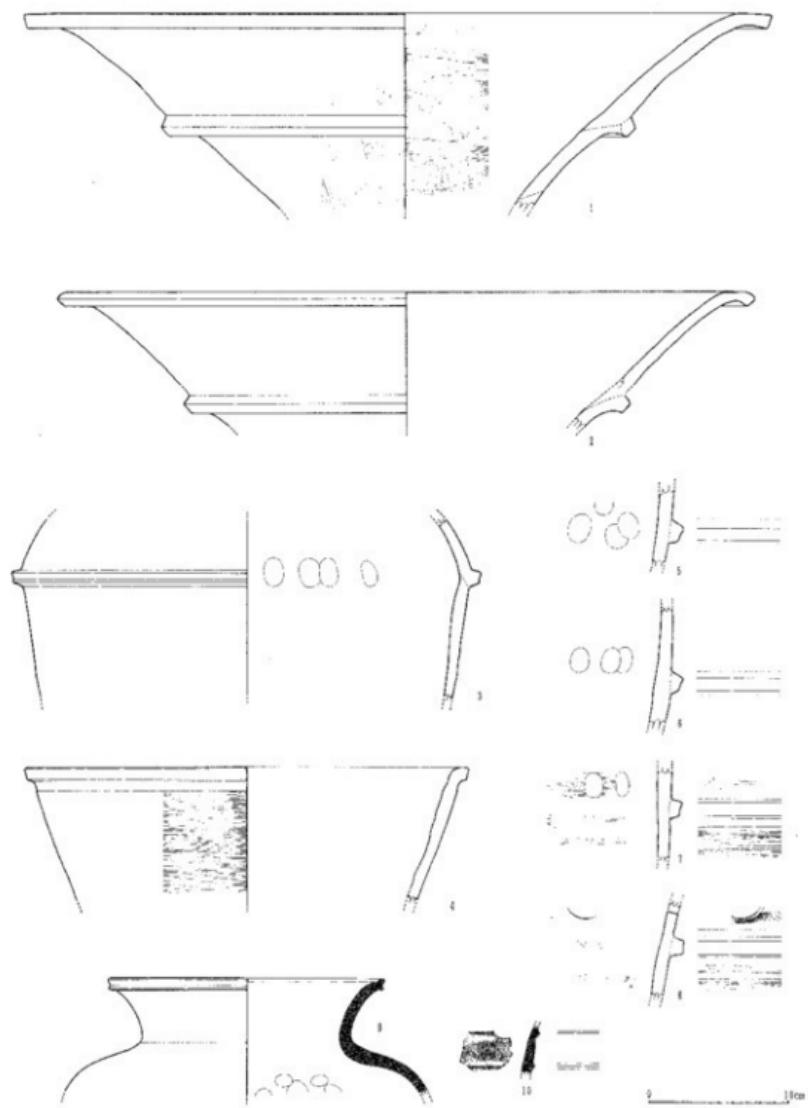
した埴裾が確認された。この埴裾の地山直上からは朝顔形埴輪上部がほぼ完全な形で出土したが、南トレンチで確認された周溝からの埴輪の出土状況と比べるとその出土状況は極めて特異であり、当初からこの状態で置かれていた可能性が高いと思われる。

北トレンチは深部まで攪乱されてはいたものの、攪乱層中からは埴輪片と須恵器の甕の

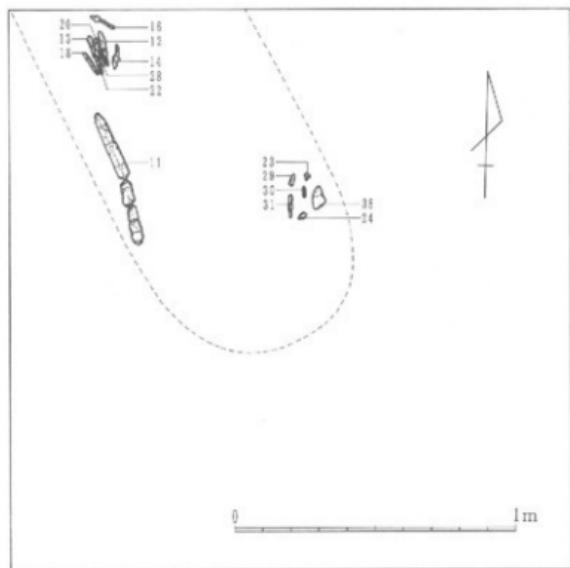
—L=50.00m



第8図 城山1号墳埴裾及び遺物出土状況



第9図 城山1号墳墳丘周辺出土遺物実測図



第10図 城山1号墳主体部鉄器出土状況実測図

破片が多数出土しており、周溝の残存部も確認できた。

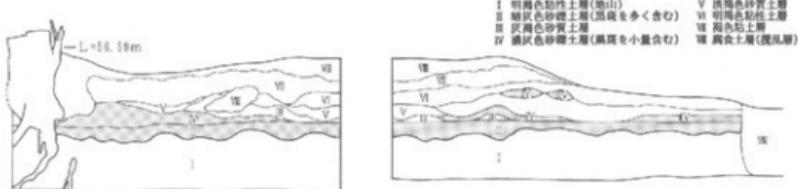
以上の結果から、1号墳は南北に13m、東西に12m程の橢円形を呈する円墳であり、高さは推定で2m程度であったと考えられる。

北トレントでは攢乱層から須恵器の甕片が多数出土しているが、これは出土状況から墳丘周辺に置かれていたものではないかと考えられる。

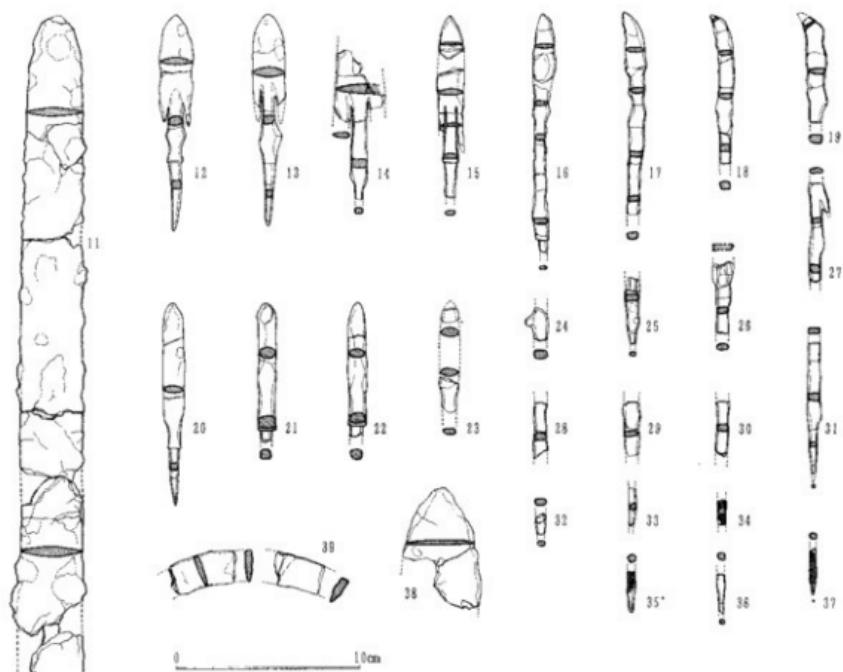
墳形を把握した後に、その中央部に2m四方のトレントを設定し掘削を開始したところ、地表面下わずか5cm程度の腐食土層の中から多数の鉄器片が出土した。

そこで、比較的の遺存状況の良いものを残して掘削したところ、第10図に示したように、ほぼ同じ方向(N-25°-W)に先端を揃えて同一レベルに平面的に遺存していた。この遺存状況から、これらの鉄器は1号墳主体部に副葬された副葬品であり、遺物の方針が主体部の首軸方位を示していると見られるが、その規模は不明である。主体部の周囲の墳丘の構築状況を見ると(第11図)、平坦に荒く削った埴山面上に何等かの土壤改良を施した黒色土を置き上面を水平に整地し、更にその上に土を盛り墳丘を構築していることが解る。

主体部から出土した鉄器は、剣が1点(11)と剣装具片(40・41)の他、多数の鉄鎌が出土している。鉄鎌には長頭の物と短頭の物があるが、先端の形態で分類すると、反りが両側



第11図 城山1号墳主体部周辺墳丘断面図



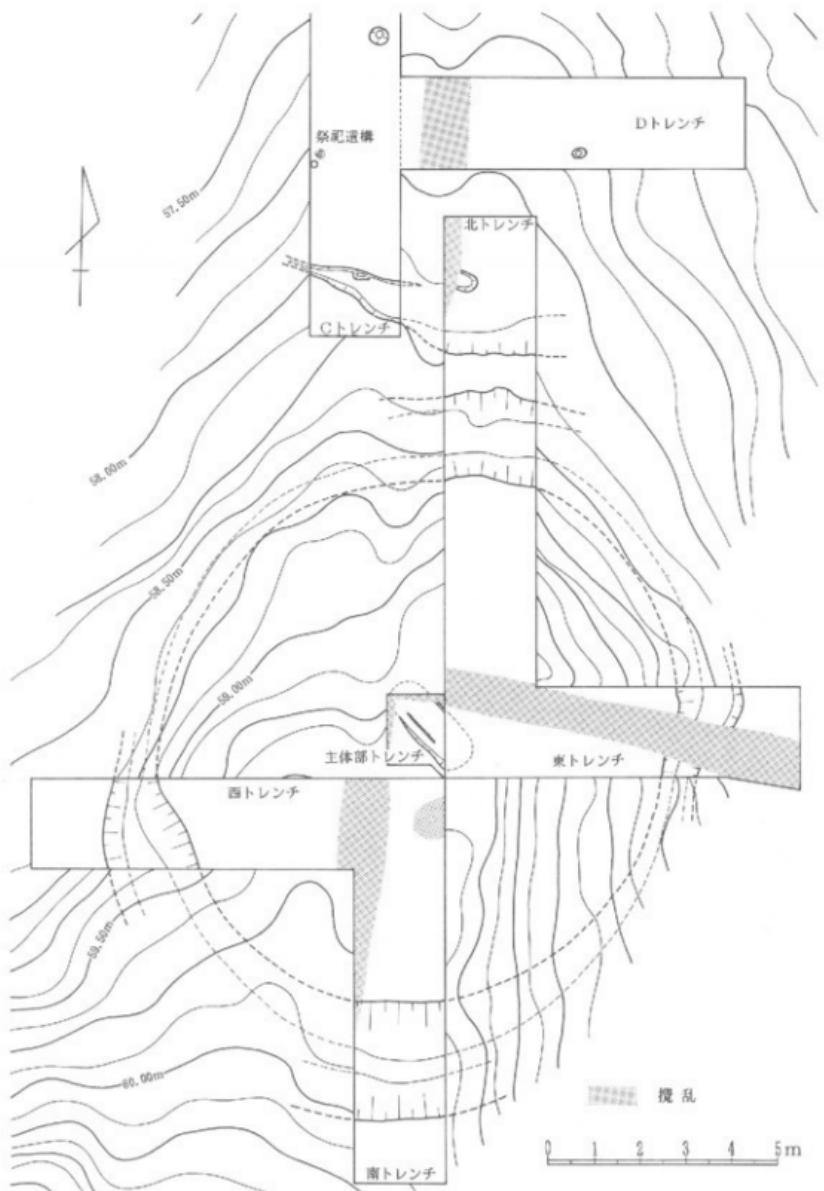
第12図
城山1号墳主体部出土鉄器実測図

に対象に付くもの(12~15)や反りを持たないもの(20~23)・先端が刀子状の形態を呈するもの(16~19)の他、儀用ではないかと思われる大型鐵片(38)があり、他に鐵劍と劍装具、曲刃鎌状の鐵器(39)なども出土している。

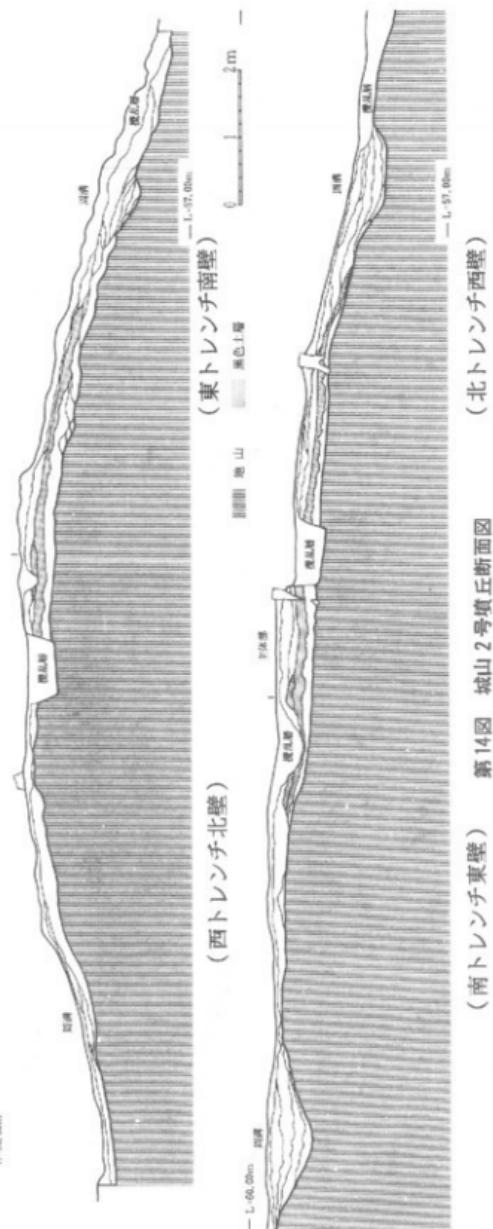
鐵器は調査完了後に他墳から出土した鐵器と共に、香川県工業技術センターの協力を得て、直ちにX線写真撮影を行い、普通寺市立郷土館で鐵器表面の鏽除去・脱塩及び樹脂含浸処理を施した。

1号墳の構築時期は、墳丘周辺部から出土した須恵器や埴輪及び主体部から出土した鐵器類などの形態から、5世紀後半頃ではないかと考えられる。

また、南トレンチでは多数の小さな柱穴状の遺構が多数検出されているが、出土遺物等は全く無くその性格等は不明である。同様の遺構は引き続き設定したC・Dトレンチでも検出されたが、やはり詳細は不明である。



第13図 城山2号墳丘地形測量図(調査区設置状況)



第14図 城山2号墳断面図

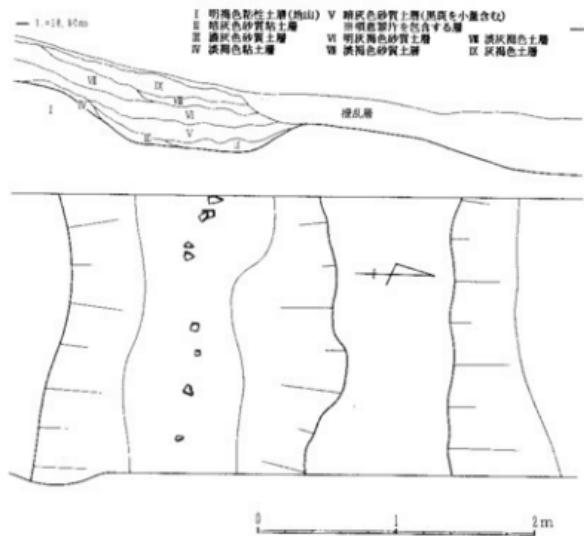
② 城山2号墳と祭祀遺構

城山2号墳は1号墳から南に20m程の平坦地形を隔てて構築された円墳であり、この平坦部中央に幅2m・長さ13mのCトレンチを南北に、その東側に幅2m・長さ7.5mのDトレンチを設定したところ、Cトレンチでは2号墳北側墳裾部付近で2点の土師器(壺)が出土し、その状況から祭祀遺構ではないかと考えられるが、この遺構については後述する。

発掘調査は1号墳と同様に事前に実施した地形の測量結果をもとに、墳丘推定範囲中央部の高まりを中心にして南北各方向に幅2mの調査区を設定し開始した。

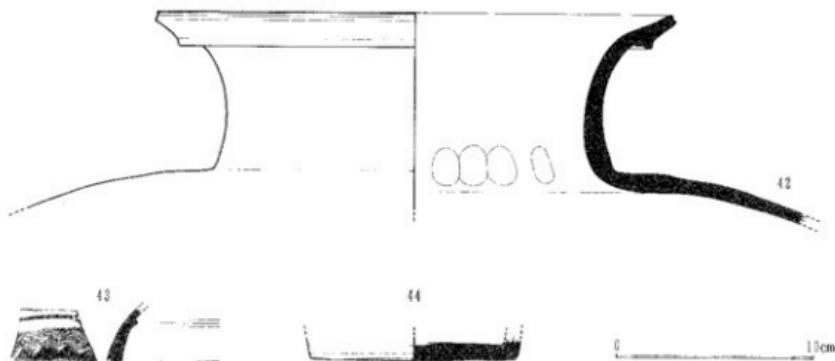
北側に設定したトレンチ北端で自然地形とみられる段があり、この南側で幅2m・深さ50cm程の周溝が検出され、埋土下層からは多数の須恵器片が出土した。須恵器片は第15図に示した周溝内のV層から出土しているが、全て小片となっており、自然に破壊したものではなく、人為的なものである可能性も考えられる。

同様の周溝は東・西トレンチ及び南トレンチでも確認されているが、東トレンチでは幅1~2m・深さ5~20cm程度、西トレンチでは幅0.7~13m・深さ30cm程度と非常に浅いのに対し、南トレンチで検出された周溝は幅2.5m、深さ1m程度と規模が大きいが、これは古墳を構築した立地の自然地形によるもので、2号墳



第15図
城山2号墳周溝及び遺物出土状況実測図（北トレンチ）

また、墳形を把握した後に、その中央部に小区画トレンチを設定し掘削したところ、地表面下15cm程度で鉄刀が完全な形で出土し、周囲に主体部の掘り方とみられる変色域が認められた。鉄刀は2号墳主体部の唯一の副葬品であり、主体部北側は試掘調査坑によって失われてはいたが、残存部の状況から主体部はN-45°Wに首軸方位を持つ、幅が1.0m程

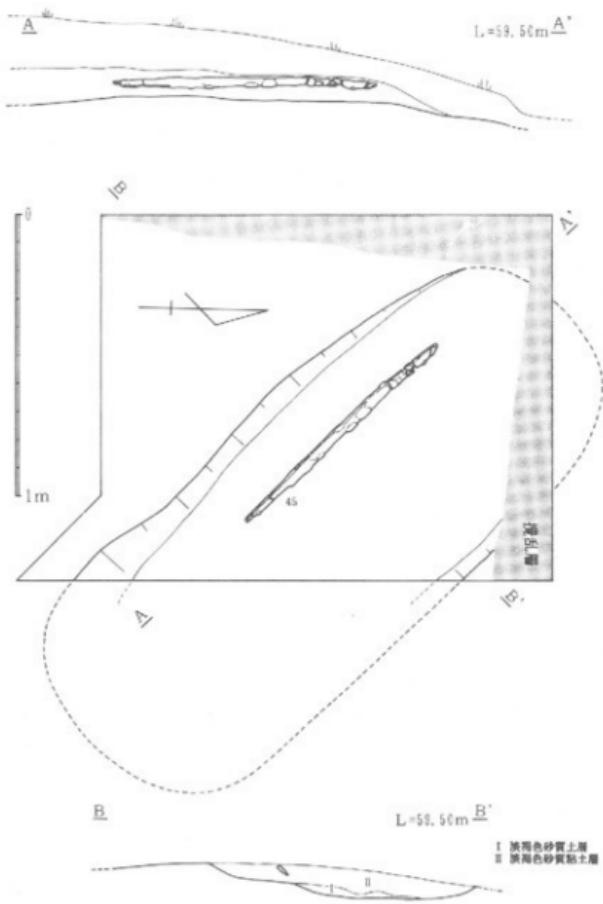


第16図 城山2号墳周溝及び墳丘周辺出土遺物実測図

は1号墳と同様に尾根筋に併せた楕円形の墳丘を形成しており、北東-南西に13m、北西-南東に11.5m程、高さは推定で2.5m程度の規模であったと考えられる。

出土遺物は、南トレンチで検出された周溝からは比較的多くの須恵器片が出土したもの、西トレンチの周溝からは少數の須恵器片と1点の埴輪小片のみ、南トレンチでは土師器の小片が1点出土しただけである。

第17図 城山2号墳主体部実測図



第17図 城山2号墳主体部実測図

度・長さ1.2～1.3m程度の土壠墓状の主体部であると推定される。

また墳丘の断面をみると、1号墳同様に、地山上に堆積した地山風化土層上に何等かの土壤改良を施した黒色土を置き上面を平らに整地し、更にその上に土を盛り墳丘を構築しており、主体部はこの黒色土層上まで掘り込まれた状態で遺存している。

2号墳の構築時期は立地条件や出土遺物から、1号墳に先行するものの時期差は余り無いものと考えられる。

第18図 城山2号墳主体部出土鉄器実測図



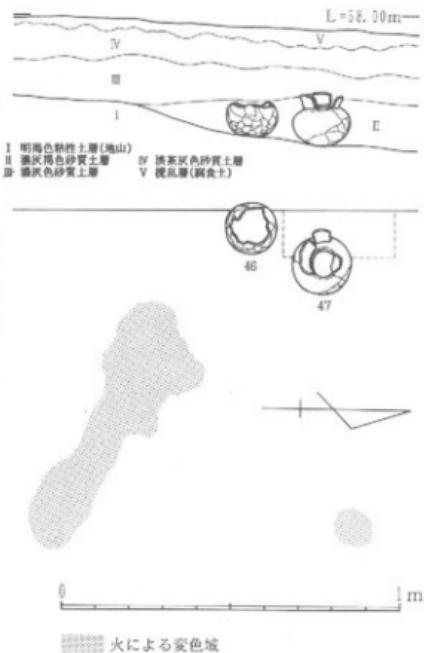
祭祀遺構

Cトレンチ南側西壁沿いでは、土師器の壺2点が地山直上に整然と並んだ状態で検出され、付近に焚火によると考えられる変色域も認められた。

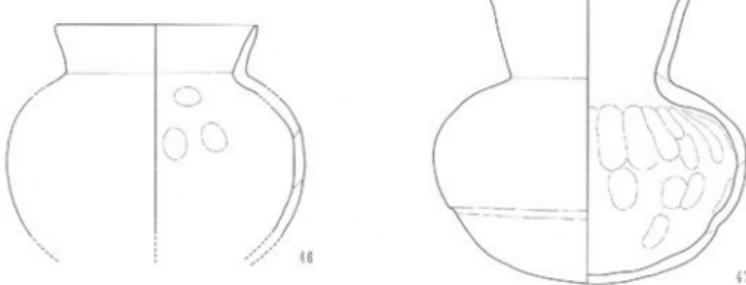
土師器壺2点はいずれも焼成が不良であり風化が著しく、アクリル水溶液で強化し処理したが、南側の土師器壺(46)の底部は復元が不可能であった。形態は短い頸部を持ち胴部がやや張った丸底であり明褐色を呈し、北側の土師器壺(47)は比較的長い頸部を持ち肩部がやや張った形態で、底部付近に筋状の窪みが巡っており表面は淡茶灰色を呈する。

形態は異なるもののいずれも古墳時代中期頃の初産ではないかと考えられる。

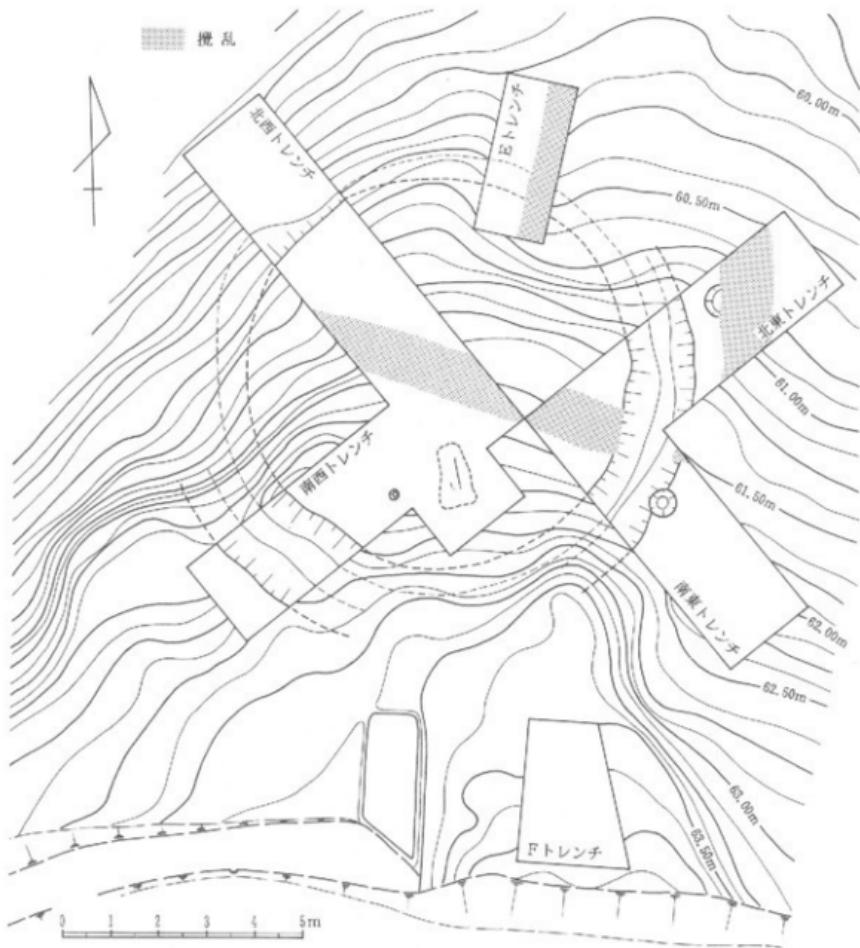
またCトレンチ南端では地山の風化に伴う溝状の自然地形が検出されたが、これは2号墳北側周溝北側の自然地形の落込みの延長であり、この遺構が古墳に伴う祭祀の痕跡であるならば、その位置関係から2号墳に伴う墓前祭祀の痕跡である可能性が高い。ただし、古墳の構築時に行われたものか、後に行われたものかどうかの判断は出来ない。



第19図 祭祀遺構実測図（Cトレンチ）



第20図 祭祀遺構出土遺物実測図



第21図 城山3号墳墳丘地形測量図（調査区設置状況）

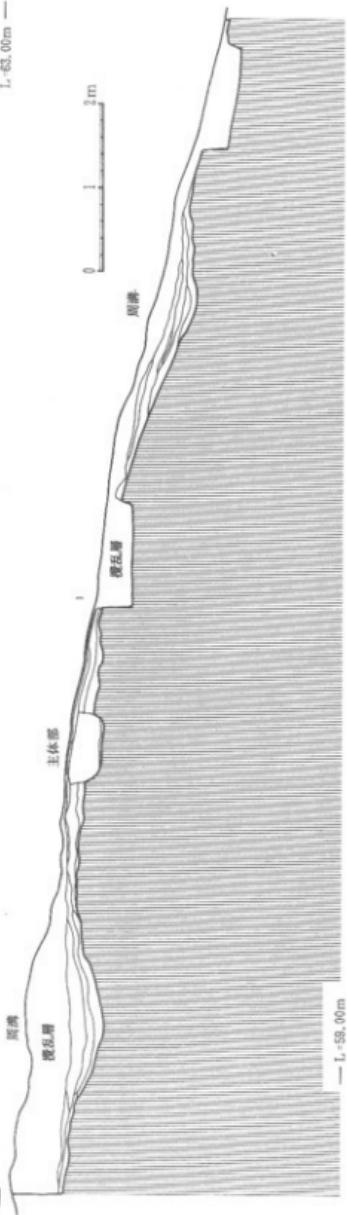
③ 城山3号墳

城山3号墳は2号墳から尾根に沿って南に3~4m隔てて構築された円墳である。3号墳南側の尾根部は畠として開墾されていた場所であり、現在は既に運動公園の一部として整地されていたため、調査に着手した時点での地形はかなり改変された。そこで地形の変化が著しい部分を避けて墳丘推定域に北東—南西・北西—南東方向の調査区を設定し掘削を開始した。

(北東トレンチ北西壁)

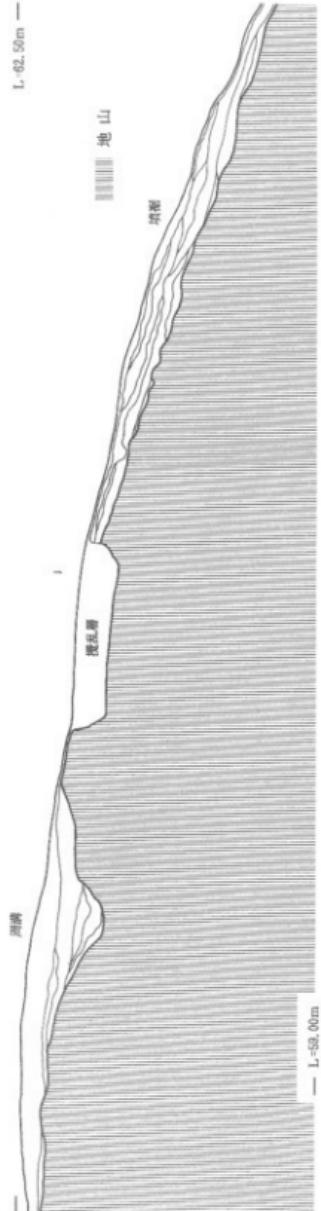
第22図 城山3号墳埴丘断面図

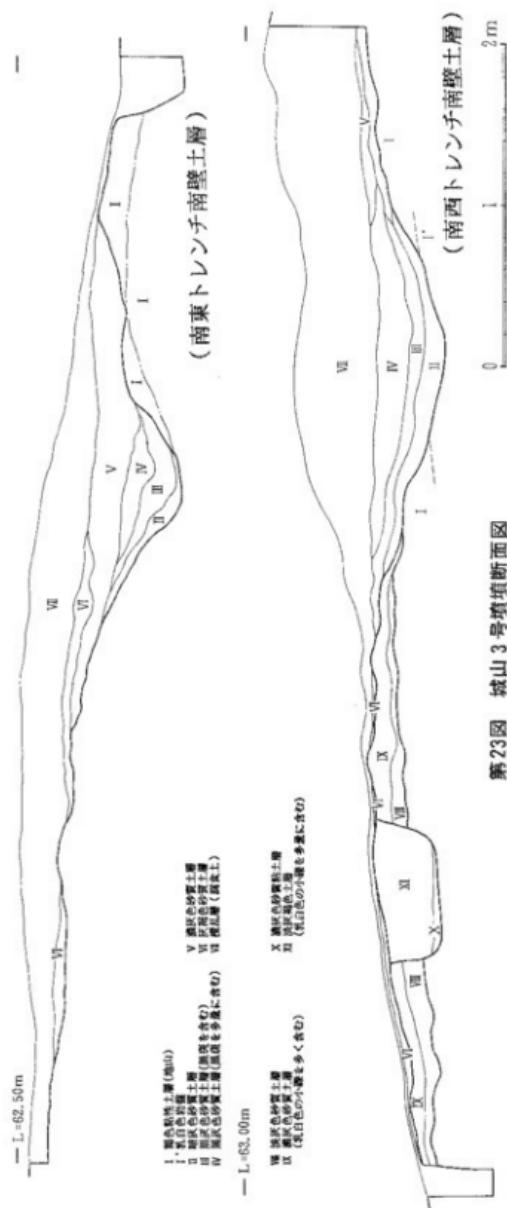
(南西トレンチ南東壁)



(北西トレンチ北東壁)

- 32 -





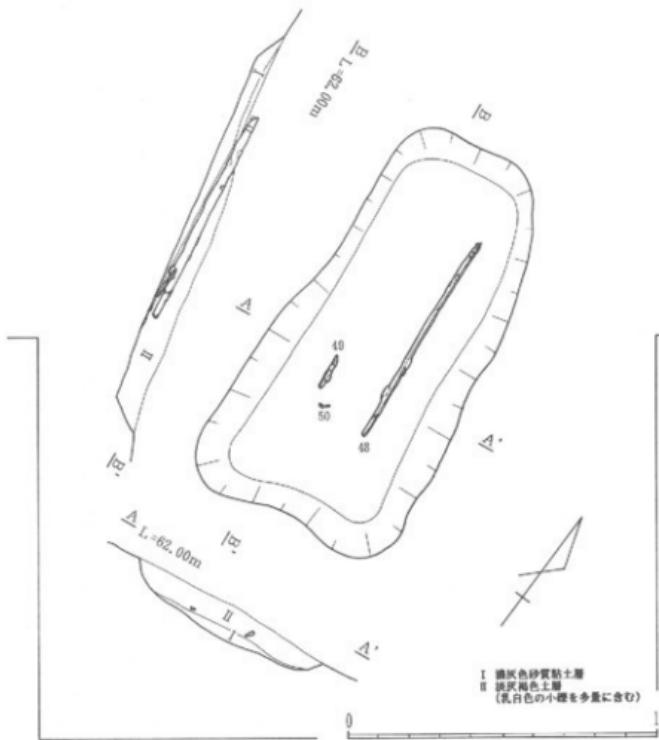
第23図 城山3号墳墳断面図

1・2号墳は比較的緩やかな地形上に構築されているのに対して、3号墳は幅の狭い傾斜面に構築されており、北東～南東～南西トレンチでは幅1.5～2.0m・深さ50～80cm程度の周溝が一定した状態で検出されたが、斜面上部の周溝底部と斜面下部の周溝底部の比高差は1.4～1.5mを計る。

北西トレンチ部分は尾根地形の傾斜が急であるため周溝は無く、地山削り出しによる地形の変化(墳裾部)が確認された。そして墳形をより明確にするため北西トレンチと南西トレンチの間にEトレンチを設定したところ、地山を削り出して整形した墳裾部が検出され、本墳の規模が直径9m、高さは推定で1.5～2.0m程であることが判明した。

また、南西にトレンチを設定した際にトレンチ北東側南東壁面沿いで鉄刀(第24図・48)が出土しており、この部分の壁面を精査したところ、土壇壁状の主体部が比較的良好く残っていることが判明した。(第23図)

3号墳は前述したように傾斜面に形成されているため、実際の墳頂部は周溝の中心から南に大きくずれしており、主体部はこの部分に構築されているようである。そこで、南東側に新たに

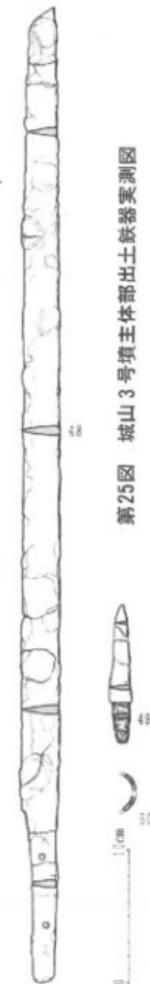


第24図 城山3号墳主体部実測図

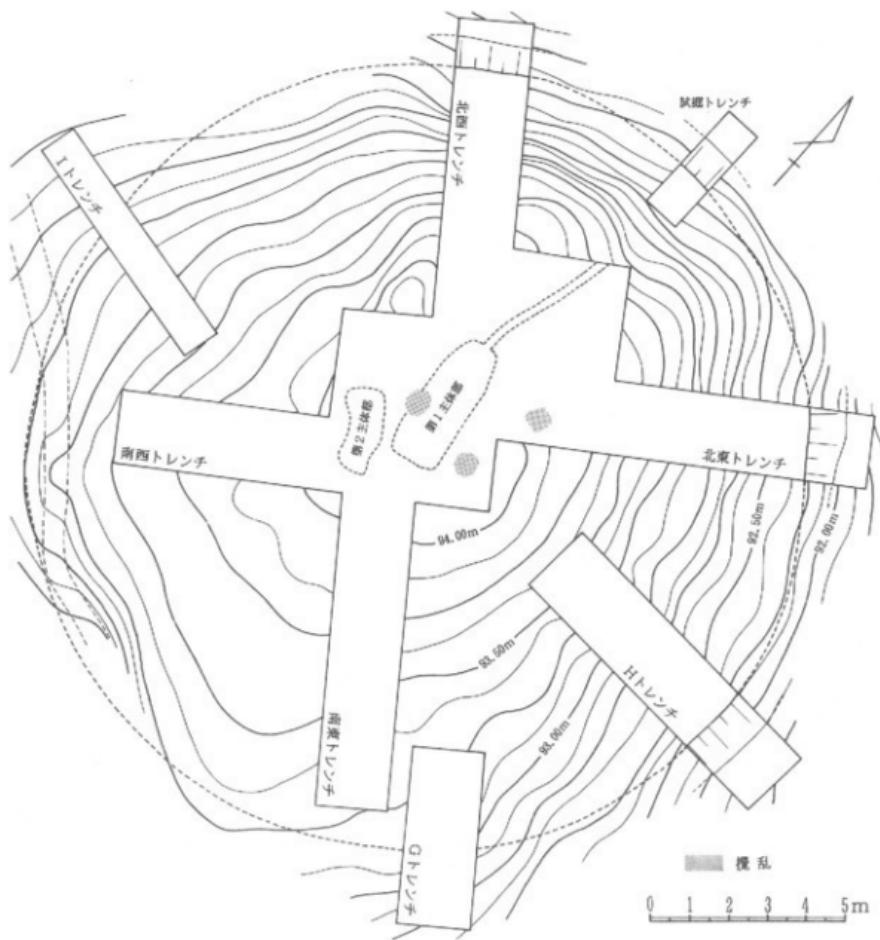
小調査区を設定したところ、南北に1.4m・東西に1.2m程で、N-6°-Wに長首軸を持つ土壙墓状の主体部が確認され、更に刀子(49)と刀装具片(50)が出土した。鉄刀は2号墳と同様に先端を北側に向か、刃部を下に向けて埋納されていた。

3号墳からの出土遺物は、主体部に副葬されていた鉄器類の他は、南東トレンチの周溝埋土下層から土師器小片が出土したのみであり、遺物から構築時期を知ることは難しい。しかしながら、1・2号墳とも古墳の立地条件こそやや異なるものの概要は似ており、3号墳は2号墳に先行するものの余り時期差は無いものと考えられる。

また、北東及び南東トレントでは直径50~60cm、深さ40cm程の土坑状の遺構が二箇所で検出されたが、3号墳よりかなり後のものであること以外不明である。



第25圖 城山3号壇主体部出土鐵器墨測圖

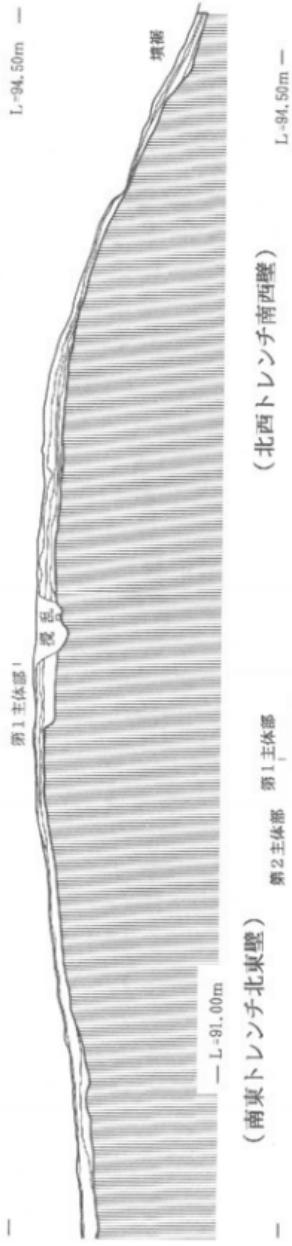


第26図 城山4号墳墳丘地形測量図（調査区設置状況）

④ 城山4号墳

城山西側の尾根における3基の円墳の発掘調査を終えた後に調査地を山頂部に移し、4号墳推定地周辺の伐採作業と地形測量作業を実施した。

4号墳では昭和63年の試掘調査によって、ほぼ南北方向に主軸を持つ小竪穴式石室と土壇墓状造構の存在が確認されており、立地条件からも本古墳群の中心的存在であることが予想できるが、地形測量の結果、北側半分は墳丘を思わせる地形が認められたものの、南側半分は不定形に自然地形であり人為的に整形された様子は認められなかった。



そこで、昭和63年の試掘調査範囲を再度検出し、これを拡張する作業を行い、必要に応じて新たな調査区を設定した。

山頂部は西方尾根とは異なり、地山は比較的堅い灰褐色の岩盤であり、腐食土層も浅く、遺構面は地表面下10~20cmで検出された。以下、調査順に併せて各調査区の概要を解説する。

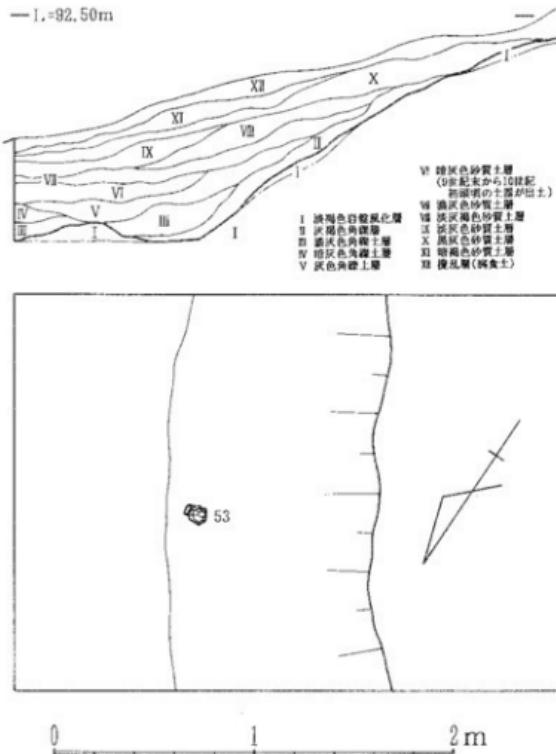
まず、南西トレンチでは北東端で第1主体部と第2主体部の南端をとらえ、南西端では地山を削り出した段落ちが確認された。本来の墳端は更に南西に遺存しているものとみられるが、山道から南西側は公有地外であるため、詳細を調査することは出来なかつた。

南東トレンチでも地形の明確な変化が認められず、東側にGトレンチを延長したが、明確な墳裾部を確認することは出来なかつた。

北東トレンチでは北東端で地山を削り出し整形した墳裾部が検出され、この埋土中層からは9世紀後半~10世紀前半頃の須恵系土師器が出土しており、本墳が自然崩壊し墳裾部が埋没して行く状況が推

第27図 城山4号墳墳丘断面図

— 1. = 92.50m



第28図 城山4号墳墳裾部土層堆積状況実測図
(北東トレンチ北端)

3.0～3.5m程の円墳であることが判明したが、平野部を見下ろす北側が丁寧に整形されているのに対して、山間部となる南側は全く整形されておらず、周溝さえ認められない。

墳丘周辺部の調査では、本墳に伴う遺物は全く出土していない。墳頂部から転落したとみられる主体部の石材片が攪乱層中に多数散在していただけである。

また、主體部は墳頂部(山頂部)に2基確認され、墳丘中央部の竪穴式石室を第1主體部、その南西側に並ぶ土壇墓状の遺構を第2主體部とした。山頂部には三角点が數回設置されており、この掘り方によって第1主體部は部分的に破壊されていたものの、遺存状況は比較的良好であった。

第1主體部の竪穴式石室には本山で産する花崗岩塊が用いられており、墓坑掘り方は全長3.7m・南端幅1.5m・北端幅1.2m、石室内側の全長2.7m・南端幅0.7m・北端幅0.6mを計る。また、石室内部には蓋に用いられていたと見られる安山岩の板石片が数点転落してお

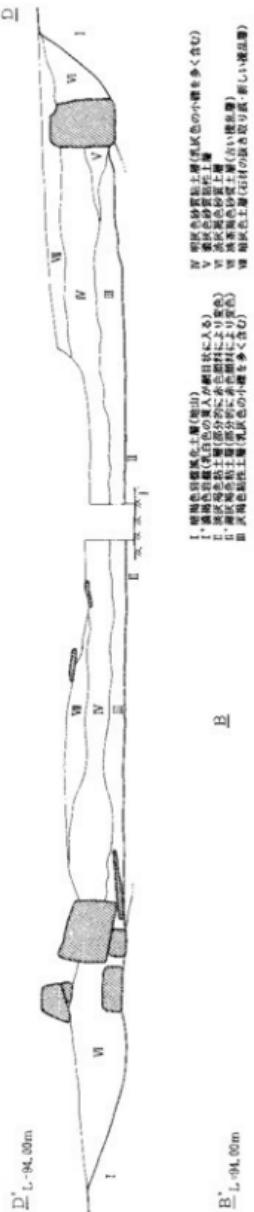
察できる。(第28図)

また北西トレンチでは、北西端で北東トレンチ同様の地山を削り出し整形による墳裾部が検出された。

本墳の形態は円墳と思われるが、北側が丁寧に整形されているのに対して、南側は不明瞭である。そこで更に、北東トレンチと南東トレンチの間にHトレンチ、南西トレンチと北西トレンチの間にIトレンチを新たに設定した。

結果、Hトレンチでは明確な墳裾部が検出されたものの、Iトレンチでは地形の変化は全く認められなかった。

北東トレンチと北西トレンチの間については試掘時のトレンチの調査結果を尊重し、新たな調査区は設定していないが、以上の結果から、4号墳は直径約21m・高さは推定で



第29圖 城山4號墳第1主體部內土層堆積狀況測圖

り、石室上部は失われているものの、周囲に風化し丸味を帯びた花崗岩が2～3段積まれ、安山岩の板石による蓋が設置されていたものと考えられる。

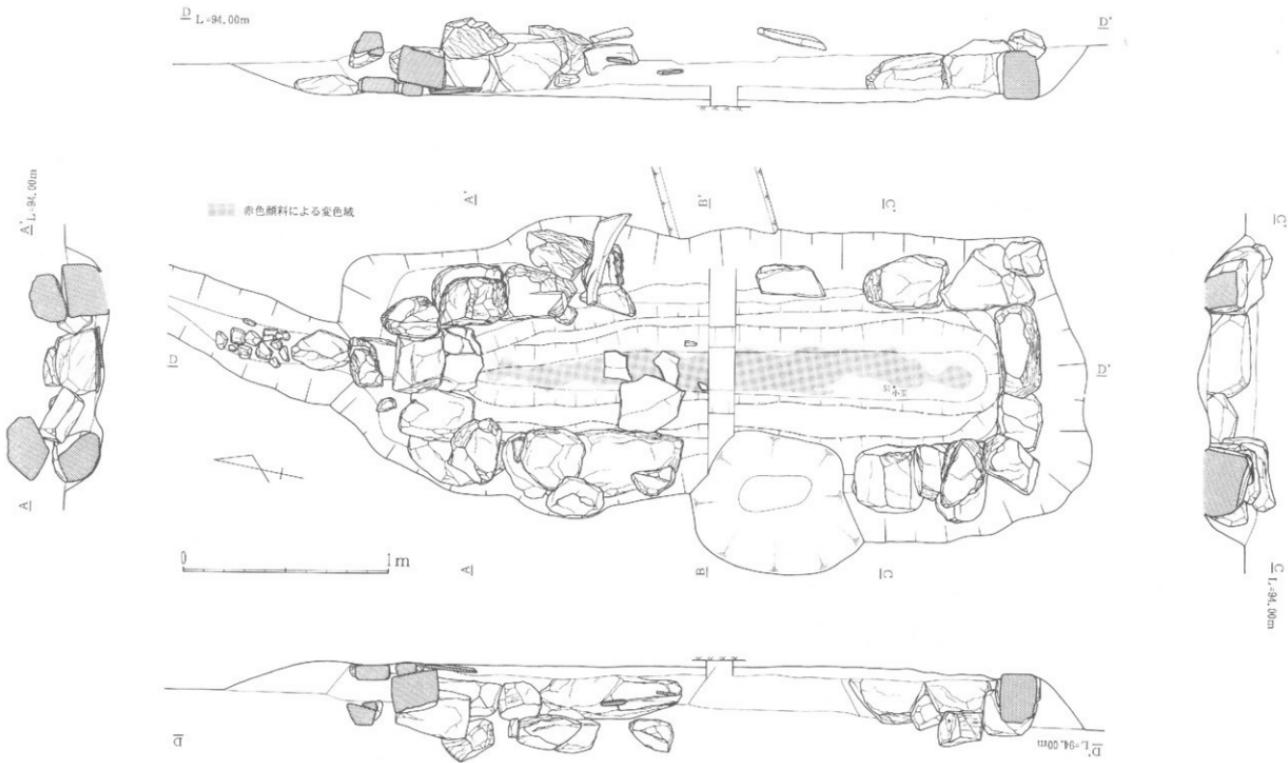
石室内は墳丘や石室の崩壊と併せて徐々に埋没したようで、石室内の埋土は堅く締まっており、盗掘された痕跡等は認められなかった。そこで、床面までの深さを把握するために、幅15cm程の小トレンチを主体部中央に設置したところ、上部検出面から20cm程で淡灰褐色の粘土床に達し、木棺の痕跡を示す丸い窪みと赤色顔料による部分的な変色が認められた。更に、3~4cm程下げるところ山である暗褐色の岩盤が木棺に併せて丸く削り込まれた面に達した。

この結果を受けて数箇所に土層観察用の畦を残しながら埋土の除去作業を実施したところ、石室底部から粘土床が検出された。粘土床には木棺の痕跡が窪みとなって残っており(全長2.6m・北端幅30cm・南端幅50cm・深さ5~8cm)、その表面が赤く変色していた。この赤色顔料の

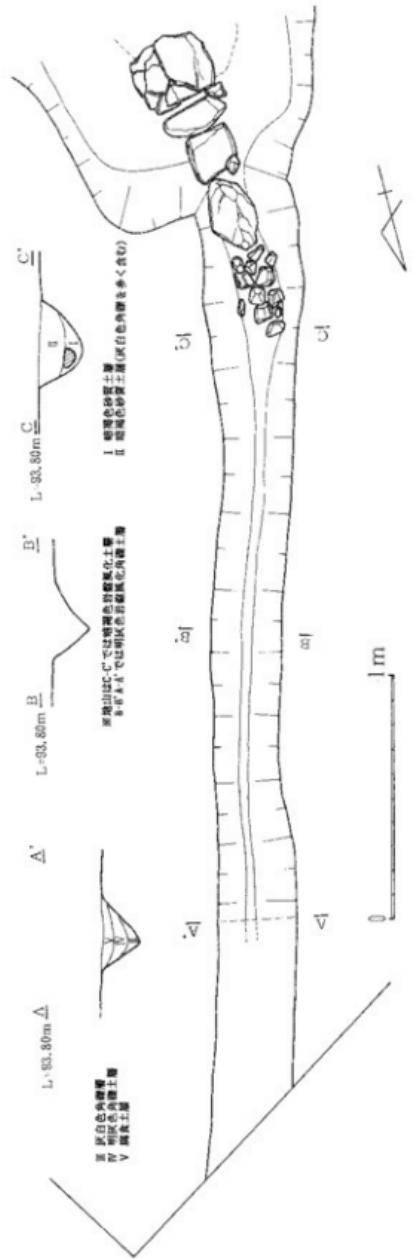
色は南側で濃く北側で薄く認められ、両側の顔料を採取し、徳島県立博物館の御好意によって分析して頂いたところ、いずれからもHg（水銀）が検出され、HgS（硫化水銀）が用いられている可能性が高いことが判明した。

また、小トレンチの結果により複数の副葬品が期待されたが、出土した遺物は石室南側の粘土床上から直径5mm程の青色のガラス小玉が1点出土しただけである。

第1主体部の首軸方位はN-12°-Wであり、石室の構造や遺物の出土位置、水銀朱の付着状況等から被葬者の頭部は南に向けられていた可能性が高い。



第30図 城山4号墳第1主体部実測図



第31図 城山4号墳第1主体部排水溝実測図

また、石室南壁の石材の下に薄い安山岩の板石が設置されていた。これについても、当時は理解に苦しんだが、

第32図

城山4号墳第1主体部出土遺物実測図

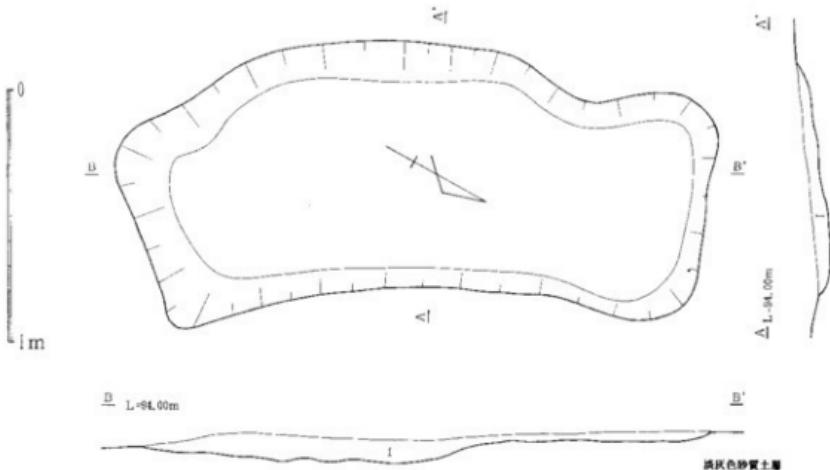
試掘調査時に確認された溝状造構に連結されていることが判明し、これが第1主体部の排水溝であることが判明した。

この溝は主体部検出のために拡張した調査区北側では容易に検出されたが、石室との連結部分が上面では確認できず、また、この溝の上部埋土が比較的新しい腐食土であり、この部分の北延長が現地形の窪みとなり地表面から容易に判別出来るため、新しいものではないかと当初考えたが、溝状造構と石室の間を丹念に調査したところ、石室南壁最下段の安山岩の板石から更に3点の石材と砾群を用いて北に延びる暗渠排水溝が検出された。

本墳の構築当時に堅い岩盤に掘り込まれ、埋め戻された排水溝の上部埋土が、墳丘の崩壊と共に流した後に新しい土が堆積したものであり、主体部に近い部分はその盛土によって保護され、流出部分は現地形にその名残を留め、現在に至ったものと見られる。

排水溝は主体部付近ではU字形の断面形を呈し底部に石材が入るが、石材が無い部分はV字形の断面形を呈し、規模は幅30cm・深さ15~20cm程度である。

また、4号墳が構築された時期については副葬品がガラス小玉1点だけである



第33図 城山4号墳第2主体部実測図

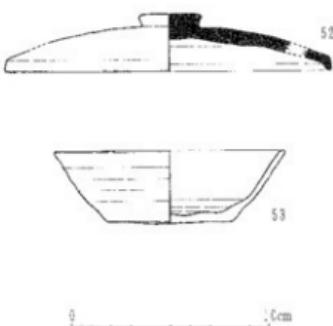
ため明言は出来ないが、粘土床中から高坏の一部とみられる2点の土器片が出土している。これは古墳期の土師器ではなく、弥生土器の特徴を呈した遺物であり、本墳は古墳時代前期でも古段階に属するものではないかと考えられる。

また、第2主体部は地山に浅く掘り込まれた最大幅1m・全長2.3m・深さ15~20cm程の歪んだ長方形を呈する土壠墓状の遺構であるが、遺物等は全く無く性格等は不明である。しかしながら、第1主体部との位置的な関係からみれば、第1主体部構築後に造られた施設である可能性が高いと思われる。

4号墳及び1~3号墳周辺では古墳時代以降の遺物も数点採取されているが、第34図に示した2点の遺物は遺構の埋土中から出土したものである。

52は1号墳南トレンチで検出された周溝の埋土中層から出土した7~8世紀頃の須恵器の坏蓋であり、53は4号墳北東トレンチで検出された墳裾部の埋土中層から出土した9世紀後半~10世紀前半頃の須恵系土師器の坏である。

近年、香川県下の後期古墳において古代から中世頃の土器の発見例が多く報告されているが、古墳時代より後に古墳で行われた何等かの祭祀的行為の痕跡ではないかと考えられており、今回得られた資料についても同様の印象を得た。



第34図
城山古墳群調査区出土遺物実測図

第四章 まとめ

今回実施された城山古墳群の発掘調査では1基の前期古墳と3基の中期古墳及び古墳に伴う祭祀遺構が確認された。出土した副葬品等は決して多くはないが、得られた資料には極めて興味深い点が多い。

まず、前期古墳である4号墳では墳丘の形態が注目される。立地条件は申し分無いが、北側のみを意識して造成しており南側は自然地形のままで手が加えられていない。しかしながら、排水溝や水銀朱等の最低限度の配慮がなされているようである。中期に構築された1～3号墳についても、主体部の方位や立地条件から見て4号墳と同一系譜の在地豪族によって築かれたものと見られるが、このような古式群集墳は県下では数が少なく、墳丘の構築技術、主体部の構築状況や副葬品の内容等様々な点で注目できる。以下、その特徴及び問題点を列記する。

- 技術的面では1・2号墳は東西に傾斜する馬背状地形に構築されており、尾根筋方向に長い梢円形を呈しているが、復元墳頂上から周溝までの直線距離はほぼ均等であり、紐をコンパス状に用いて変形した地形上に円を描こうとした結果ではないかと考えられる。(3号墳は斜面ではあるが平面的な地形に構築されているのではなく正円を呈している。)
- 1・2号墳は地山上に土壤改良を施したと見られる黒色土を厚く客土し平らに造成した上に墳丘を構築しているが、後期古墳に見られる版築技術に共通している。
- 1・2号墳は比較的緩やかな地形上に構築されており、2基の古墳の間の平坦部には1基の古墳を造るだけの充分な空白地があるに対して、3号墳は条件の悪い傾斜面に構築されている。古式群集墳が構成される際に何等かの制約があるのであろうか？
- 出土遺物は必ずしも多くはないが、1～3号墳全ての主体部から未盗掘に近い状態で複数の副葬品が得られたことは好運である。いずれも鉄製武具であり、副葬状況にも共通点が認められる。
- 1号墳の朝顔形埴輪は出土状況から見て、当初から埴輪上部だけを埴輪部に伏せて置かれていた可能性が高い。また、古式須恵器は1号及び2号墳から出土しているが、いずれも古墳北側(斜面下側)からのみ出土であり、出土状況から見て主体部に副葬されたものではなく、埴輪と同様に埴丘上に置かれていたようである。地方豪族の小規模古墳における埴輪や古式須恵器の使用方法について考えさせられる。
- 最後に主体部の方位について触れておく。1～4号墳共に北からやや西に振った方位を向いており、副葬された鉄器類もその先端を同一方位に向いている点で共通しているが、北ではなく北からやや西に振った特定の方位を向いている。城山は平野部でも奥にあるため、瀬戸内海は北方の大東川流域部分だけであり、各古墳の主体部の南側に立ち首輪方位を見ると、それぞれの方向が瀬戸内海を展望できる限られた方位と一致する点は注

目できよう。

これらの問題点の比較検討については、今後増加が予想される集落遺跡や古墳との比較検討を待たい。

また、今ではその方位に瀬戸大橋が見え、その手前には昭和60～62年度に四国横断自動車道路建設に伴い発掘調査が行われ、大東川沿いの自然堤防上に広がる下川津遺跡が確認されている。下川津遺跡は弥生時代前期から室町時代に及ぶ集落を中心とした遺跡群であるが、弥生時代中期から後期前半と古墳時代中期（5世紀代）に二度の断絶期が確認されている。

これはこの地域に中期古墳が少ないと対応しており、今回の城山古墳群の発掘調査によって得られた在地豪族による小規模な古墳群には、当時、彼等の置かれていた社会環境について考えさせられる要素が多く、また、古墳時代後期に現われる新興勢力の残した集落や古墳への変化を調べることで、当地の在地豪族の置かれていた社会的環境の変化や勢力の交替等の解明ができるのではないかと、大きな期待が寄せられる。

なお、本古墳群は調査後遺跡公園として整備し保存される予定であり、現在その準備が進んでいる。

図 版



第35図 城山と飯山総合運動公園全景

自治かがわ 創刊号 1/1992 (財)香川県市町村振興協会 表紙から転載



第36図 城山1～3号墳周辺部の発掘調査着手前の状況（北から）



第37図 城山1～3号墳周辺部の伐採後作業と地形測量作業（北から）



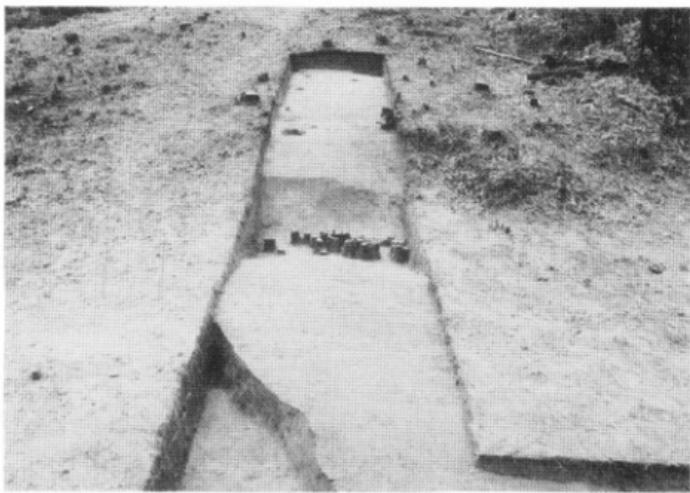
第38図 伐採作業後の城山1～3号墳（北から）



第39図 発掘調査前の城山1号墳（西から）



第40図 城山1号墳南トレンチ発掘作業風景（北から）



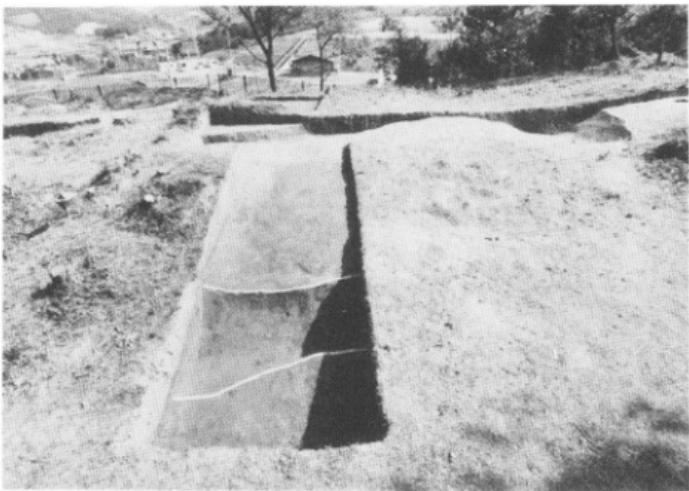
第41図 城山1号墳南トレンチ周溝検出状況（北から）



第42図 城山1号墳南トレンチ周溝内埴輪出土状況（北から）



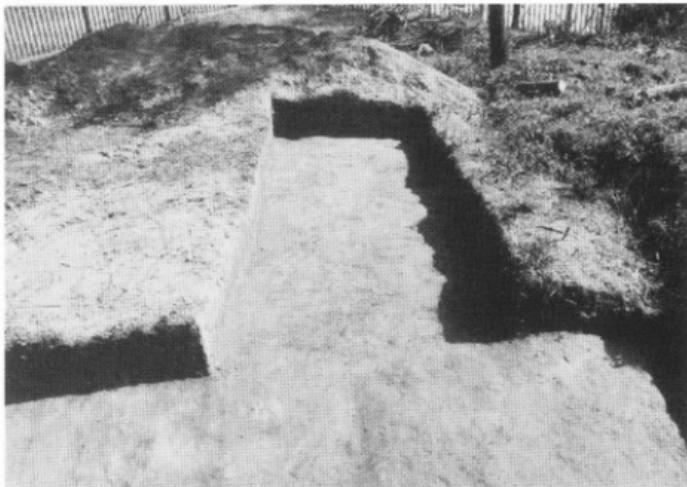
第43図 城山1号墳南トレンチ周溝内土層堆積状況（西から）



第44図 城山1号墳西トレント周溝検出状況（西から）



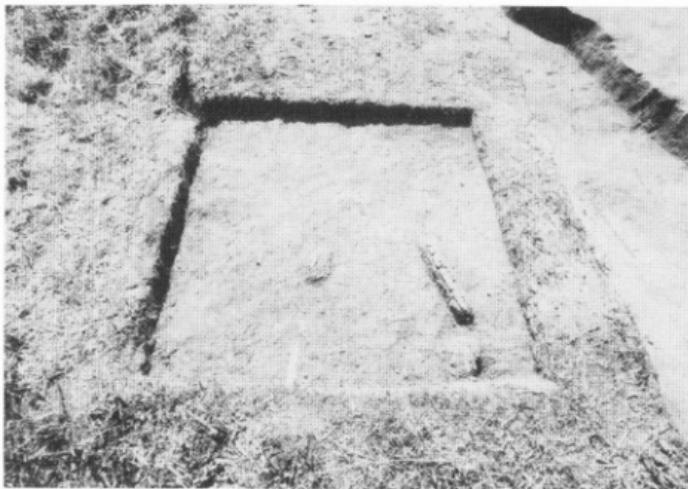
第45図 城山1号墳北トレント周溝検出状況（北から）



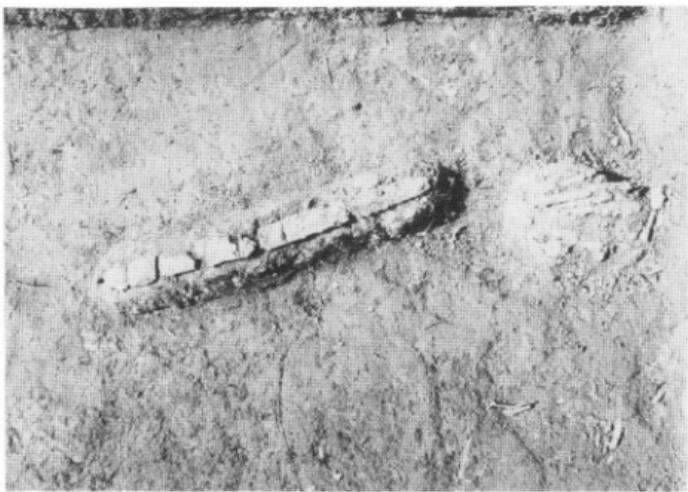
第46図 城山1号墳東トレンチ設定状況（西から）



第47図 城山1号墳Bトレンチ朝顔形埴輪出土状況（北から）



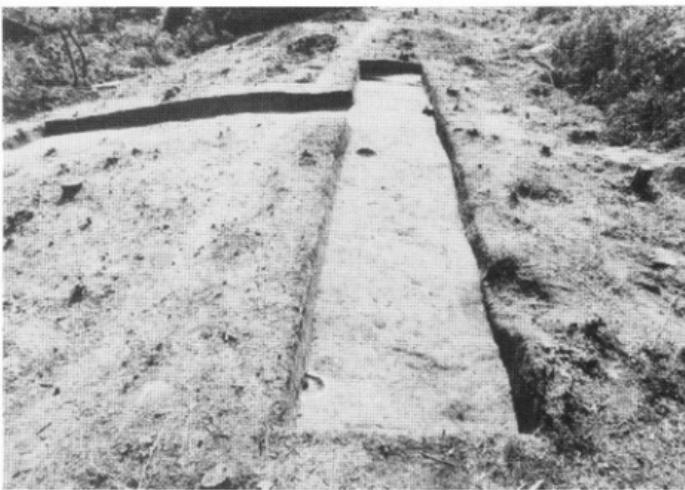
第48図 城山1号墳主体部トレンチ・鉄器出土状況（北から）



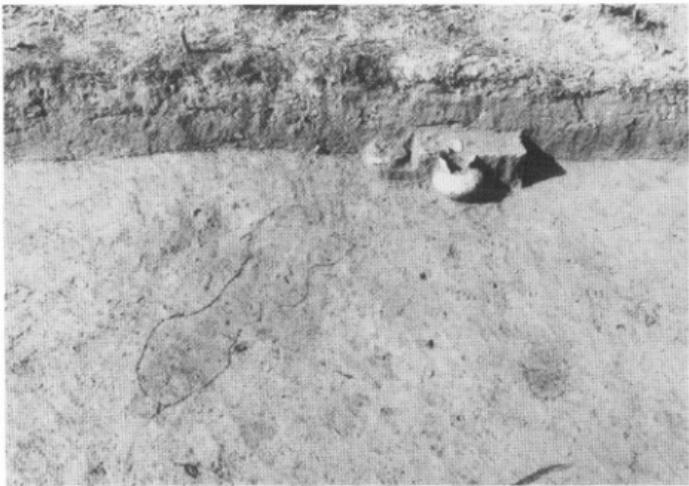
第49図 城山1号墳主体部トレンチ・鉄器出土状況（部分・東から）



第50図 城山1号墳主体部西側土層堆積状況
(南トレンチ西壁土層北端・西から)



第51図 Cトレンチ及びBトレンチ設定状況 (北から)



第52図 C トレンチ祭祀遺構検出状況（東から）



第53図 C トレンチ祭祀遺構と土層堆積状況（東から）



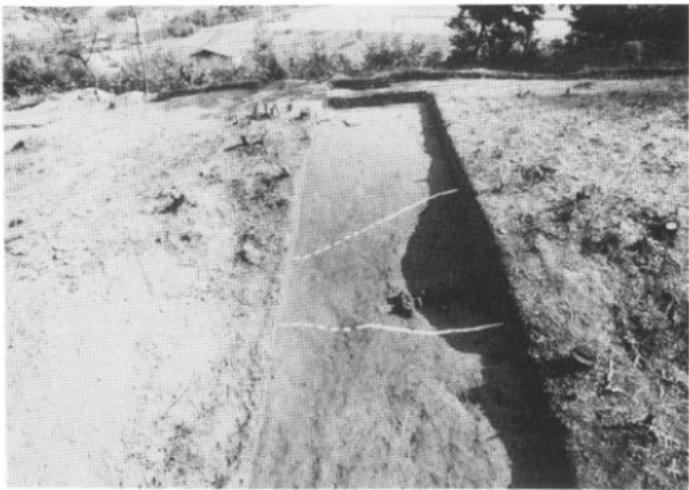
第54図 城山2号墳北トレンチ周溝検出状況（北から）



第55図 城山2号墳北トレンチ周溝内須恵器出土状況（北から）



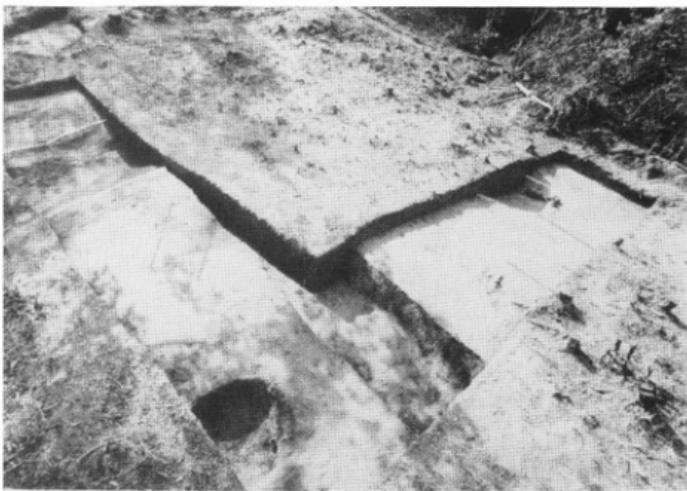
第56図 城山2号墳北トレンチ周溝内土層堆積状況（西から）



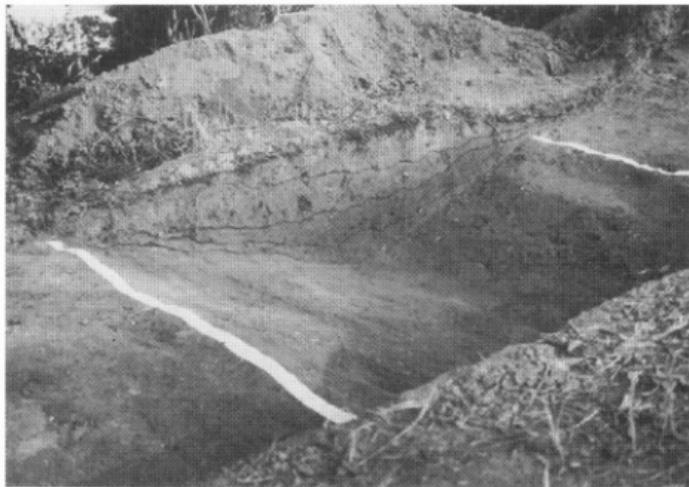
第57図 城山2号墳西トレンチ周溝検出状況（西から）



第58図 城山2号墳東トレンチ墳裾部検出状況（東から）



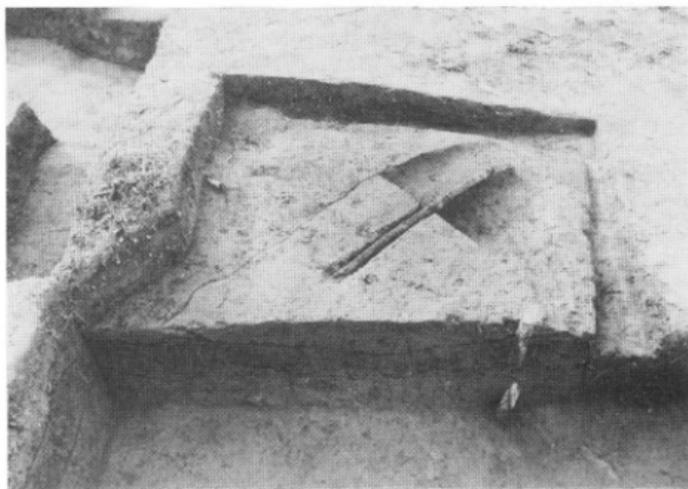
第59図 城山2号墳南トレンチ・西トレンチ周溝検出状況（北東から）



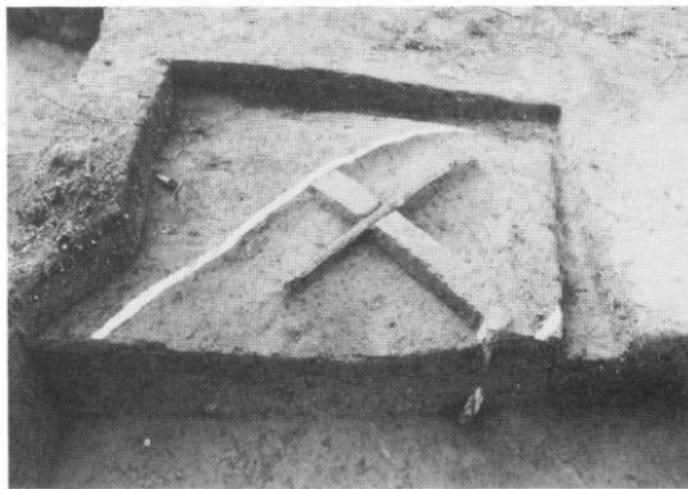
第60図 城山2号墳南トレンチ周溝検出状況（北西から）



第61図 城山2号墳主体部東側土層堆積状況（北東から）



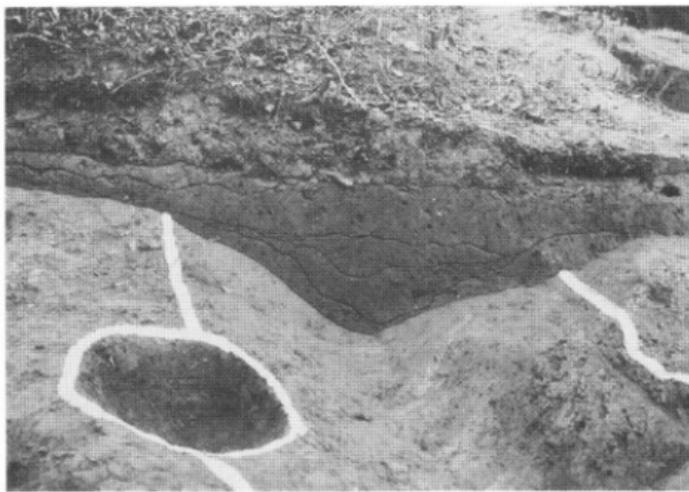
第62図 城山2号墳主体部検出状況（東から）



第63図 城山2号墳主体部完掘状況（東から）



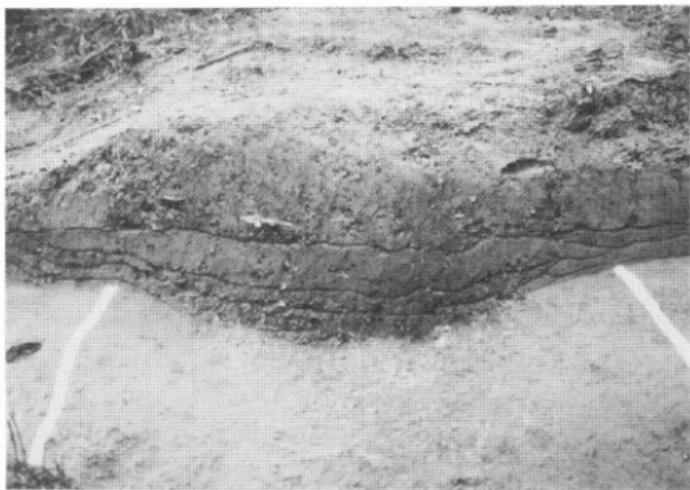
第64図 城山3号墳北東トレンチ・南東トレンチ周溝検出状況（西から）



第65図 城山3号墳北東トレンチ周溝内土層堆積状況（北東から）



第66図 城山3号墳南西トレンチ周溝検出状況と主体部検出状況（北東から）



第67図 城山3号墳南トレンチ周溝内土層堆積状況（北西から）